

令和2年度

人間生活学総合研究科教授内容

児童学児童教育学専攻

東京家政大学大学院

R2 シラバス 児童学児童教育学専攻

(1) 児童学児童教育学専攻(修士課程)

区分	授 業 科 目	単位数	必選別	担 当 教 員	備考(シラバススペース)
保育学分野	保 育 学 特 論	2	選	教 授 榎 沢 良 彦	幼専 P1
	保 育 学 演 習	2	選	教 授 戸 田 雅 美	幼専 P3
	保 育 史 特 論	2	選	講師(兼任) 小 久 保 圭 一 郎	幼専 P4
	保 育 心 理 学 特 論	2	選	准 教 授 堀 科	幼専 P5
	児 童 文 化 特 論	2	選	教 授 是 澤 優 子	幼・小専 P7
	児 童 文 化 演 習	2	選	准 教 授 森 田 浩 章	幼・小専 P9
保育実践学分野	保 育 実 践 演 習	2	選	教 授 戸 田 雅 美	幼専 P10
	障 が い 児 保 育 特 論	2	選	講師(兼任) 山 田 陽 子	幼専 P11
	保 育 マ ネ ジ メ ン ト 特 論	2	選	客員教授 佐 藤 暁 子	幼専 P12
	保 育 内 容 実 践 研 究 (環 境)	2	選	教 授 大 澤 力	幼専 P14
	保 育 内 容 実 践 研 究 (こ と ば)	2	選	教 授 戸 田 雅 美	幼専 P16
	保 育 内 容 実 践 研 究 (表 現)	2	選	教 授 花 輪 充	幼専 P17
	保 育 内 容 実 践 研 究 (健 康)	2	選	兼任講師 鈴 木 隆	幼専 P18
保 育 内 容 実 践 研 究 (人 間 関 係)	2	選	教 授 岩 立 京 子	幼専 P19	
育児支援学分野	育 児 支 援 学 特 論	2	選	講師(兼任) 浜 口 順 子	P21
	育 児 支 援 学 演 習	2	選	講師(兼任) 太 田 光 洋	P22
	児 童 福 祉 学 特 論	2	選	教 授 岩 崎 美 智 子	P23
	児 童 福 祉 学 演 習	2	選	准 教 授 松 本 な る み	P25
	保 育 カ ウ ン セ リ ン グ 特 論	2	選	准 教 授 武 田 洋 子	幼専 P27
	保 育 相 談 演 習	2	選	教 授 金 城 悟	幼専 P28
	家 族 関 係 学 特 論	2	選	兼任講師 平 野 順 子	P29
子ども臨床学分野	子 ど も 臨 床 学 特 論	2	選	教 授 宮 島 祐 崇 准 教 授 阿 部	幼専 P30
	子 ど も 臨 床 学 演 習	2	選	准 教 授 野 澤 純 子	幼専 P31
	小 児 健 康 保 健 学 特 論	2	選	客員教授 岩 田 力	幼・小専 P32 P33
				兼任講師 及 川 郁 子	
	小 児 健 康 保 健 学 演 習	2	選	教 授 高 野 貴 子	幼・小専 P34 P35
				准 教 授 細 井 香	
	発 達 心 理 学 特 論	2	選	准 教 授 野 口 隆 子	幼専 P36
子 ど も 芸 術 療 法 特 論	2	選	教 授 池 森 隆 虎 教 授 保 坂 邦 子	幼専 P37	
			准 教 授 佐 藤 邦 子		
子 ど も 芸 術 療 法 演 習	2	選	教 授 池 森 隆 虎 教 授 保 坂 邦 子 准 教 授 佐 藤 邦 子	幼専 P38	
教育実践学分野	教 育 実 践 演 習 (国 語)	2	選	准 教 授 阿 部 藤 子	小専 P39
	教 育 実 践 演 習 (算 数)	2	選	客員教授 家 田 晴 行	小専 P40
	教 育 実 践 演 習 (社 会)	2	選	准 教 授 二 川 正 浩	小専 P41
	教 育 実 践 演 習 (理 科)	2	選	教 授 大 澤 力	小専 P42
	教 育 実 践 演 習 (音 楽)	2	選	教 授 笹 井 邦 彦	小専 P43
	教 育 実 践 演 習 (図 画 工 作)	2	選	教 授 結 城 孝 雄	小専 P44
	教 育 実 践 演 習 (家 庭)	2	選	兼任講師 平 野 順 子	小専 P45

R2 シラバス 児童学児童教育学専攻

区分	授 業 科 目	単位数	必選別	担 当 教 員	備考(シラバスページ)
学校教育学分野	教 育 学 特 論	2	選	講師(兼任) 藤 井 穂 高	幼・小専 P46
	教 育 心 理 学 特 論	2	選	教 授 平 山 祐 一 郎	幼・小専 P48
	学 級 経 営 特 論	2	選	客員教授 家 田 晴 行	幼・小専 P49
	道 徳 教 育 演 習	2	選	教 授 走 井 洋 一	幼・小専 P50
	特 別 支 援 教 育 演 習	2	選	教 授 半 澤 嘉 博	幼・小専 P52
	情 報 処 理 演 習 I	2	選	兼任講師 佐 藤 隆 弘	幼・小専 P53
	情 報 処 理 演 習 II	2	選	教 授 平 山 祐 一 郎	幼・小専 P54
研究指導	特 別 研 究	10	必	教 授 花岩 榎大是 笹高戸走半平 宮結阿武野野細堀森 准教授 崎 美 智 充子彦力子彦子美一博郎祐雄崇子子香科章 沢 良 澤 優邦貴雅洋嘉一 野 井 田 井 澤 山 祐島 孝 洋隆純 井 浩 城 部 田 口 澤 井 浩	P55

※教職課程については、免許種別に、備考欄に記載した授業科目から24単位以上を履修する。

授業科目名：保育学特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：榎沢良彦
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>大学院修士課程児童学児童教育学専攻における専門的知識修得のためのコースワークの授業として及び研究を行う上で必要な保育学の高度な知識を修得するリサーチワークの授業として保育学特論を講じる。到達目標は以下の事項である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育学と自然科学の違いを説明できる。 ・主観的研究の妥当性を説明できる。 ・研究者が保育現場に入ることの影響を説明できる。 ・保育実践における子どもと保育者の体験を生きられている空間の視点で分析できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>保育の現場において研究的実践ないし、創造性豊かな研究を進めるためには、保育学研究の特質を理解する必要がある。そこで、この授業においては、児童学児童教育学専攻の学位授与方針に基づき、研究対象である保育実践の存在特性とそれを研究することの意味と方法について検討し、実践研究を「学」として確立するための基礎固めをする。その上で、実践研究の重要な部分である子どもの体験世界を「生きられている空間」の側面から理解することを試みる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：研究対象としての保育の概念</p> <p>第2回：保育（実践）を研究することの意味：実践の一般化、人間精神の自己理解</p> <p>第3回：科学的研究の意味</p> <p>第4回：主観的研究の意味（1）：生態学と臨床の知</p> <p>第5回：主観的研究の意味（2）：主体変様</p> <p>第6回：現象学的アプローチ</p> <p>第7回：解釈学的アプローチ</p> <p>第8回：実践研究の問題</p> <p>第9回：保育現場における研究者の存在</p> <p>第10回：子どもを理解することの意味</p> <p>第11回：保育実践をすることの意味</p> <p>第12回：現象学的空間論</p> <p>第13回：子どもにより生きられている保育空間</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 各回のテーマに関して文献（雑誌記事や本）で調べ、分かったことをノートにまとめる。</p> <p>[事後学修] テーマについて授業で考えたことをノートにまとめる。</p>			
<p>テキスト：なし</p>			
<p>参考書・参考資料等：・榎沢良彦『生きられる保育空間』学文社 ・O.F. ボルノウ『人間と空間』せりか書房 ・竹田青嗣『現象学入門』日本放送出版協会 ・中谷宇吉郎『科学の方法』岩波書店</p>			

学生に対する評価：

授業での発言内容などの平常点：40点、課題レポート（講評する）：60点

その他： 特になし

授業科目名： 保育学演習	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：戸田雅美
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育実践の基盤となる理論に関する把握の仕方（方法論）を理解し、説明できる。 ・実際の論文を読み、そこでの問いの立て方、問いと方法論のつながり、問いからデータの収集、問いと結論の関係、考察の仕方について、理解し、分析的に説明できる。 ・先行研究について理解し、実際に先行研究を検索し、それを論文に適切に引用することができる。 ・論文を批判的に読み、互いに意見を交わすことができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>幼稚園・保育所ならびに認定こども園等の場で行われている保育実践を対象とした研究の在り方に関する理論とその実際を演習形式にて学ぶ。具体的には、まず、文献や諸資料などから実践研究の方法論とその課題をおさえる。そして、受講生の関心に即しながら、問題（研究目的）を設定し、観察法（参与観察を含む）ならびに面接法（インタビュー）等の方法を以て得られたデータに基づく受講生間の事例検討を介しながら、考察を加えていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：保育学のこれまでの知見とテーマについて 1 歴史的視点から</p> <p>第3回：保育学のこれまでの知見とテーマについて 2 現在の到達点</p> <p>第4回：保育学の対象について 1 「子ども」をめぐって</p> <p>第5回：保育学の対象について 2 「保育」をめぐって</p> <p>第6回：保育学の方法について 1 事例研究</p> <p>第7回：保育学の方法について 2 調査研究の一例としてのインタビュー研究</p> <p>第8回：保育学の問題意識と研究について—実際の論文を読み解く 1 思想的研究</p> <p>第9回：保育学の問題意識と研究について—実際の論文を読み解く 2 保育方法の研究</p> <p>第10回：保育学の問題意識と研究について—実際の論文を読み解く 3 幼児理解の研究</p> <p>第11回：保育学の問題意識と研究について—実際の論文を読み解く 4 遊び研究</p> <p>第12回：保育実践における反省的思考と研究の在り方 1 実践者の記録を基にして</p> <p>第13回：保育実践における反省的思考と研究の在り方 2 観察者の記録を基にして</p> <p>第14回：保育学研究と保育実践との関係についての総合的な考察</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 論文を検索し、その中から論文を選び、解読し、考察を発表できる準備をする。</p> <p>[事後学修] 1編の論文の引用文献等を読み、それらの文献が、その論文とどのように関係しているかについて、まとめる。</p>			
<p>テキスト： 特になし</p>			
<p>参考書・参考資料等： 随時指示する</p>			
<p>学生に対する評価： 論文に関する考察の発表（50%）授業中の議論（25%）最終レポート（25%）</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名：保育史特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：小久保圭一郎
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育所・幼稚園制度と内容および今後の展開・課題について説明し議論ができる。 ・ 幼保一元化の変遷について説明できる。 ・ 保育史上主要な人物に関する資料を精査し、その内容を説明できる。 ・ 保育史における資料からその時代背景を読み取り、議論できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>明治初期公的に始まった日本の保育制度。そこで展開された保育内容、そして保育方法。それらが明治期以降どのような変遷を辿ったのか。これら保育制度と保育内容、保育方法の変遷を辿り、その背景と意味について検討する。また保育史上重要とされる人物に焦点をあて、彼らの理論の現代的意義について、史料をもとに検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：幼保一元化の変遷―戦前</p> <p>第2回：幼保一元化の変遷―戦後</p> <p>第3回：保育史上の人物相関―日本</p> <p>第4回：保育史上の人物相関―西洋</p> <p>第5回：保育史上の人物の探究―明治～大正期</p> <p>第6回：保育史上の人物の探究―昭和～平成期</p> <p>第7回：史料写真からその時代背景を探る―明治期</p> <p>第8回：史料写真からその時代背景を探る―大正期</p> <p>第9回：史料写真からその時代背景を探る―昭和前期</p> <p>第10回：史料写真からその時代背景を探る―昭和後期</p> <p>第11回：日本幼児保育史を読む―第1巻・第2巻</p> <p>第12回：日本幼児保育史を読む―第3巻・第4巻</p> <p>第13回：日本幼児保育史を読む―第5巻・第6巻</p> <p>第14回：まとめと解説</p>			
<p>授業外学修：(各100分程度)</p> <p>[事前学修] 授業は基本的に課題の発表・議論を中心に行なうので、そのための事前課題について調査する。 [事後学修] 毎授業後には、その授業での学びについて報告書をまとめ、提出する。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>授業内で適宜提示する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業内で適宜提示する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業への参加態度(40%)、課題への取り組み(40%)、レポート(20%)の3面から評価する。</p>			
<p>その他：特になし</p>			

授業科目名： 保育心理学特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：堀 科
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乳児期、幼児期前半ならびに幼児期後半の子どもの心の発達が理解できる。 ・保育・教育の場、家庭における子どもの発達理解を深め、その育ちに適した保育環境を工夫することができる。 ・子ども一人一人への具体的な援助を考えることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>保育・教育の場、また家庭の中で子どもの生活や育ちを支えるとき、子どもを理解する手がかりとして保育では心理学が用いられている。とくに乳幼児期は個体として顕著な発達のステージがあり、こうしたステージを理解することは子どもの育ちの姿やその育ちに適した生活のありよう、そして遊びなどの子どもの深い理解と共に、子どもをとりまく事象の理解にもつながる。子どもの姿を心理学的な視点で紐解きながら、実際の子ども一人一人の具体的な援助へ学びを深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：胎児期に関する心理学関連の文献講読と事例</p> <p>第3回：第2回の内容の討議</p> <p>第4回：乳児期に関する心理学関連の文献講読と事例</p> <p>第5回：第2回の内容の討議</p> <p>第6回：幼児期に関する心理学関連の文献の講読と事例</p> <p>第7回：第6回の内容の討議</p> <p>第8回：児童期に関する心理学関連の文献の講読と事例</p> <p>第9回：第8回の内容の討議</p> <p>第10回：発達支援を必要とする幼児に関する心理学関連の文献の講読と事例</p> <p>第11回：第10回の内容の討議</p> <p>第12回：発達支援を必要とする児童に関する心理学関連の文献の講読と事例</p> <p>第13回：第12回の内容の討議</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：(各100分程度)</p> <p>[事前学修] 予め、各文献について担当者を決め、各担当者は内容について整理すると共に、関連領域の資料についても併せ、レポートならびにレジュメとしてまとめる。他の学生については授業で取り上げる文献を読んでおくと共に、関連領域について復習しておく。</p> <p>[事後学修] 授業内容を振り返り、論点と課題を整理しておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>決まったテキストは使用せず、受講者と相談し決定する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 内容に応じて適宜、呈示、紹介する。</p>			

学生に対する評価：

レポートの内容また討議への参加等により評価する。レポート60%、討議への参加40%とする。

その他：

特になし

授業科目名： 児童文化特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：是澤優子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本特論は、「児童文化観の歴史的展開」をテーマに据え、以下の4点を到達目標とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童文化の基本的な概念と歴史的展開を理解することができる。 ・現代の子どもを取りまく児童文化の諸問題と社会の諸要因との関係について、児童文化の歴史的展開をふまえて考察することができる。 ・各テーマにおいて適切な報告書を準備し、分かりやすく発表することができる。 ・討論において、積極的かつ建設的に参加できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>児童文化は、「子どもがつくりだす文化」と「大人が子どものためにつくりだす文化」という視座を合わせ持つ概念である。本特論では、児童学児童教育学専攻の学位授与方針に基づき、子どもの幸せに児童文化学の立場から貢献するために、児童文化の基本的な概念と歴史的展開を理解し、文献や資料の読解を通して、近世から近代における子ども観および児童文化観の展開を概観する。</p> <p>児童文化が現代にいたるまで、どのように認識され展開してきたのかを考察することによって、現代の子どもを取りまく児童文化の諸問題と社会の諸要因との関係を、児童文化的な見地から具体的に検討していく。授業は講義ならびに受講生による報告と討論を組み合わせる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： 授業ガイダンス ―授業の目的と進め方の説明―</p> <p>第2回： 現代社会に生きる子どもと児童文化について ―学生の問題意識報告―</p> <p>第3回： 児童文化の視点</p> <p>第4回： 児童文化の歴史的展開（1）古代・中世から近世</p> <p>第5回： 児童文化の歴史的展開（2）明治・大正期から昭和初期</p> <p>第6回： 児童文化の歴史的展開（3）1940年代（戦中・戦後）</p> <p>第7回： 児童文化の歴史的展開（4）高度経済成長期から1980年代</p> <p>第8回： 児童文化の歴史的展開（5）1990年代から現在</p> <p>第9回： 児童文化に関する課題の整理（1）子どもの生活文化について</p> <p>第10回： 児童文化に関する課題の整理（2）子どもの遊びについて</p> <p>第11回： 児童文化に関する課題の整理（3）児童文化財について</p> <p>第12回： 児童文化に関する課題の整理（4）子どもの生活とメディアについて</p> <p>第13回： 児童文化に関する課題の整理（5）子ども文化と子どものための文化の均衡</p> <p>第14回： まとめ：子ども観と児童文化観</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] テーマに関する文献・論文などを読み、要点と自分の意見をまとめた「報告書(予習)」を作成する。 [事後学修] 授業内容を振り返り、論点と課題を整理した「報告書(復習)」を作成する。</p>			
<p>テキスト： なし。</p> <p>児童文化領域に関する受講生の学習状況に合わせて、適宜プリントを配布する。</p>			

参考書・参考資料等： 山住正巳・中江和恵『子育ての書』全3巻（平凡社東洋文庫、1976）、本田和子『子ども100年のエポック』（フレーベル館、2000）、フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』（杉山光信他訳、みすず書房、1980）等。その他は、進捗状況を見ながら適宜紹介する。

学生に対する評価：

発表(30%)、討論への参加(30%)、レポート(40%)により、総合的に評価する。また、発表やレポートに対して、到達目標に照らし合わせながらフィードバックを行う。

その他： 特になし

授業科目名：児童文化演習	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：森田浩章
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童文化の多様性をみつめ、現代の子どもにとって児童文化の果たす役割について議論することができる。 ・児童文化の歴史的 position や価値を見直し、児童文化の分野ごとの理解を深めることができる。 ・児童文化を広く「子どもと文化」と理解し子どもと文化全体を関係づけて説明することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>児童文化財、すなわち、児童文学、幼児演劇、幼児造形、子供の遊びと玩具、ペープサート、影絵、子ども向けアニメーションとマンガ本、その他、子どもをめぐる「楽しみと面白さ」としての児童文化財の各論を実践論としてレクチャーし、この提案に従って議論する。特に興味を持てる文化財については小論としてまとめられるよう指導する。子どもと劇の先駆者、村上幸雄氏の遺作および遺品を使った資料の読み込み等の研究にも一部参加し、調査研究の実際にも触れていきたい。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：児童文化とは何か。戦後の児童文化論を中心に。</p> <p>第2回：児童文化、児童文学の近代史、現代史。おとぎばなしから子どもの文学へ。</p> <p>第3回：児童文化と母親たちの児童文化活動。読みきかせと子ども図書館。</p> <p>第4回：各論1 童話、児童文学、幼年文学。</p> <p>第5回：各論2 絵本、近代日本の絵本と現代絵本。マンガと鳥獣戯画。</p> <p>第6回：各論3 絵本、ヨーロッパ・アメリカの絵本。</p> <p>第7回：各論4 アジア・アフリカ・南アメリカの絵本。</p> <p>第8回：各論5 子どもの演劇と親子劇場。村上幸雄と劇の台本。</p> <p>第9回：各論6 子どもの歌とアニメソング、わらべ歌。ペープサート、影絵。</p> <p>第10回：各論7 子どもとあそび、伝承あそびを中心に。</p> <p>第11回：各論8 子どものあそび、プレイパークと現代のあそび。</p> <p>第12回：各論9 コンピューターゲームの意味と役割。アニメーション及びキャラクターについて。</p> <p>第13回：児童文化と保育と教育、教育の中でのあそびと児童文化。</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：(各100分程度)</p> <p>[事前学修] 予め、心に残る絵本、あそびの種類、アニメ作品をメモして、その作品の出会いの年令をつかんでおくこと。 [事後学修] 授業で学修したことをまとめておくこと。</p>			
<p>テキスト：子どもの文化（月刊誌 子どもの文化研究所発行）および別冊 子どもの文化理論誌</p>			
<p>参考書・参考資料等：子どもの文化（バックナンバー）を活用。および「光の中へ」（つなん出版）</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>レポート（50%）、口頭での質疑の内容および口頭での問題提起の内容（50%）で判定し、70%以上を合格とする。レポートについては、書き直しを行い、基準に達するよう指導する。</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名： 保育実践演習	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：戸田雅美
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育実践の基盤となる理論に関する把握の仕方を理解し、説明できる ・保育実践の記録のとり方がわかり、記録と考察としてまとめることができる ・保育実践の記録から、その実践上の課題を発見し、意見としてまとめることができる 			
<p>授業の概要</p> <p>幼稚園・保育所ならびに認定こども園等の場で行われている保育実践を対象とした研究の在り方に関する理論とその実際を演習形式にて学ぶ。具体的には、まず、文献や諸資料などから実践研究の方法論とその課題をおさえる。そして、受講生の関心に即しながら、問題（研究目的）を設定し、観察法（参与観察を含む）ならびに面接法（インタビュー）等の方法を以て得られたデータに基づく受講生間の事例検討を介しながら、考察を加えていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：保育学における実践研究の意義とデータ収集の方法に関する講義</p> <p>第2回：諸論文にみる研究方法論上の課題の検討① 「研究者の立ち位置」に焦点を当てて</p> <p>第3回：諸論文にみる研究方法論上の課題の検討② 「問いの立て方」に焦点を当てて</p> <p>第4回：諸論文にみる研究方法論上の課題の検討③ 「研究協力者との関係」に焦点を当てて</p> <p>第5回：諸論文にみる研究方法論上の課題の検討④ 「考察の観点」に焦点を当てて</p> <p>第6回：事例研究の実施に向けた準備① テーマの設定</p> <p>第7回：事例研究の実施に向けた準備② 動機の確認・目的の再設定</p> <p>第8回：事例研究の実施に向けた準備③ データ収集に関する方法の選択</p> <p>第9回：データの収集① 観察法による実践の理解（乳児）</p> <p>第10回：データの収集② 観察法による実践の理解（幼児）</p> <p>第11回：事例検討① 観察法によって採集されたデータの整理と分析</p> <p>第12回：事例検討② 面接法によって採集されたデータの整理と分析</p> <p>第13回：事例検討③ 考察の展開に関する意見交換</p> <p>第14回：授業内容の総括ならびに今後の課題の析出</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 授業で議論する内容について事前準備をしておく。</p> <p>[事後学修] 授業で学修したことをフィールドノートに整理しておく。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>特になし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>随時指定</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>実践記録と考察（50%）、記録を基にした議論（25%）、最終レポート（25%）</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名：障がい児保育特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：山田陽子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育・教育の現場において、特に障がいのある子どもに対して、身も心も子どもの傍らに在りつつ子どもの幸せやその子らしい育ちを見据えて保育することの意義を理解することができる。 ・そこから研究テーマを紡ぎ出し、独自の研究的実践を創造していくことができる。 ・各自の中にある障がいのある子どもに対する保育観を耕す過程で、子どもは多様な存在であることを説明できる。 ・インクルーシブ保育を進めるための保育者としての構えをつくることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>毎回の授業に向けて提示してある資料、文献を事前に読み解いて授業に参加し、授業やグループワークの中でテーマへの理解を深める。さらに、各自がその授業で一番考えたことをテーマにして次回までにレポートを作成し、次回の授業の初めに発表し考えを分かち合い、自由な議論を通して、各回のテーマを発展的に捉える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：保育者が子どもと出会うために受容する構えをもって始める保育の一日 第2回：保育者が一人ひとりの子どもにとっての居場所を一緒に作り育むこと 第3回：保育者が子どもの世界を共に生き、可能性を拓く援助をすること 第4回：保育者や子どもが周りの人と気持ちを紡ぎ合いながら作り出す保育の営み 第5回：保育者が見ようとすれば見えてくる、子どもが自分から環境に適応しようとする姿 第6回：保育者の成長を支え合う保育者間の相互性の中身 第7回：子どもと保育者との、その時々に関わりが生み出す関係の変化 第8回：子どもが目に見えない環境に包まれて生活することの意味 第9回：子どもの遊びに込められている人生の基本的体験 第10回：子どもが集団の中であって自分らしく生きることと周囲の人と共に生きること 第11回：子どもが相手を思いやる姿と保育者が相手を思いやる子どもの気持ちを引き出すこと 第12回：園での毎日を保育者が子どもと生き生きと出会っていくための準備 第13回：保育者が育ち合う力を一人一人の中に培うことで展開するかけがえのない自分づくり 第14回：保育者としての育つ力を信じて子どもとの保育の中で学び続ける喜び</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 事前に配布資料及び文献を読んでおく。 [事後学修] 授業後の振り返りのレポートを作成する。</p>			
<p>テキスト： なし</p>			
<p>参考書・参考資料等： 津守眞「保育者の地平」（ミネルヴァ書房）、鯨岡峻「障害児保育」（ミネルヴァ書房）、大場幸夫「子どもの傍らに在ることの意味」（萌文書林）</p>			
<p>学生に対する評価： 平常点（20%）、レポート・発表（50%）、小課題（30%）</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名： 保育マネジメント特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：佐藤暁子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 質の高い幼児教育を核に子育て支援等多様な機能を保育者等職員が協働して遂行するために、保育マネジメントの理論を理解できる。 ・ また、保育マネジメントの具体的方法を実践することができる。 ・ 「保育の質の向上と協働する組織」についての考え方を身に付けることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>幼稚園、保育所、そして認定こども園は、幼児期の教育・保育を担う就学前の施設である。平成18年教育基本法改正により第11条「幼児教育について」が新設され、幼児教育が生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものとして規定されている。我が国の激動する社会状況の中で、また、就学前の保育の基本的制度が大きく変わった今日、幼稚園、保育所、認定こども園、そして小規模保育所等地域型保育施設等多様な保育の場は、保育(教育)を核に保護者支援や地域の子育て支援のセンター等多様な機能を遂行し、社会的責任を果たすことが求められている。そこで重要なことは、就学前の保育施設を構成する保育者はじめ多様な専門性を有する職員一人ひとりの人間性・専門性を活かし、協働性を尊重する組織としての力量を高め、カリキュラム・マネジメントを通して質の高い保育や子育て支援等の提供を可能にする組織となることである。園長、施設長はじめ組織のリーダーに求められるのが、マネジメント力である。幼稚園・保育所・認定こども園等における保育という営みは、保育理念・方針のもと、保育(教育)課程を編成し、具体的な指導計画の作成、実践、評価(自己評価・外部評価)、改善に組織として取り組み、質の向上に努めている。平成30年より施行された教育要領、保育指針、教育・保育要領においては「カリキュラム・マネジメント」が強く位置づけられる。本授業では、「組織とは何か」をさまざまな事業体や歴史的経緯を通して明らかにし、また、「保育マネジメント(人的資源の運用管理、保育等の質の評価・管理、リスクマネジメント)の在り方」の基本的理論とその具体的方法について探求する。受講者と調整し、保育現場を訪問し、保育の実態等の理解を深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：本授業のねらい・保育マネジメントとは①</p> <p>第2回：保育マネジメントの基本①～組織とは・就学前の保育を担う組織に求められるもの</p> <p>第3回：保育マネジメントの基本②～質の高い保育等の提供可能な協働する組織となるために</p> <p>第4回：幼稚園における保育マネジメントの理論と実際①～幼稚園教育要領とマネジメント</p> <p>第5回：幼稚園における保育マネジメントの理論と実際②～幼稚園の実際</p> <p>第6回：幼稚園における保育マネジメントの理論と実際③レポートに基づく報告会</p> <p>第7回：保育所における保育マネジメントの理論と実際①～保育所保育指針とマネジメント</p> <p>第8回：保育所における保育マネジメントの理論と実際②～保育所の実際</p> <p>第9回：保育所における保育マネジメントの理論と実際③～レポートに基づく報告会</p> <p>第10回：幼保一体化施設における保育マネジメントの理論と実際①幼保連携型認定こども園教育・保育要領とマネジメント</p> <p>第11回：幼保一体化施設における保育マネジメントの理論と実際②認定こども園の実際</p> <p>第12回：幼保一体化施設における保育マネジメントの理論と実際③認定こども園の実際</p>			

第13回：小規模保育所等地域型保育施設における保育マネジメントの理論と実際④
第14回：まとめ～保育マネジメントの基本的理論とその実態とを関連づけてまとめ発表する。
授業外学修：（各100分程度） [事前学修] 次回の授業に向けて資料収集等をし、文献を読む。 [事後学修] 議論したことを、まとめる。
テキスト： 必要に応じて資料を配付
参考書・参考資料等： 幼稚園教育要領解説書, 保育所保育指針解説書、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園における自己評価ガイドライン、幼稚園における学校評価ガイドライン、保育所における自己評価ガイドライン、福祉サービス第三者評価基準ガイドラインにおける各評価項目の判断基準等
学生に対する評価： 授業への準備等取り組み意欲・態度(30%)、討議の場でのコミュニケーション力(30%)、レポート(40%)を総合して評価する。
その他： 見学、ビデオカンファレンス等を通して実践的研修を行う。

授業科目名： 保育内容実践研究（環境）	単位数： 2単位	選択 （幼専）	担当教員名：大澤 力
<p>授業の到達目標及びテーマ：</p> <p>保育は、環境を通して行われるものであることをふまえ、到達目標を以下の事項とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育内容の実践において重要な領域（環境）について身近な自然環境や社会環境における遊びや生活を確実に受け止めることができる。 ・保育展開できる資質・能力の育成を目指し、子どもの保育環境の望ましい展開を列挙する事ができる。 ・今日的な幼児教育や保育の課題を踏まえた現場における環境のあり方を述べる事ができる。 			
<p>授業の概要：</p> <p>センス・オブ・ワンダーと幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領で述べられている保育内容（環境）の事項を尊重する。そのため、保育の実践現場での環境の活用においてセンス・オブ・ワンダーを実感すべく、日常保育でも活用できる身近な地域社会を取り入れた散歩、身近な動植物の飼育栽培、地・水・火・風など自然物を活用した遊び、自然現象を取り入れた科学遊びなど事前学習や事後学習、体験学習や課題レポートを多く取り入れ、理論と実践を結びつけたところでの学びを重視する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：はじめに 幼児教育・保育における環境の重要性とは？ 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育,保育要領の重要性</p> <p>第2回：センス・オブ・ワンダーの重要性</p> <p>第3回：子どもと社会環境①：身近な環境を活かす散歩の楽しさ</p> <p>第4回：子どもと社会環境②：身近な環境を活かす散歩地図作り</p> <p>第5回：子どもと自然環境①：動物の観察で子どもに育つ資質・能力＜観察実践＞</p> <p>第6回：子どもと自然環境②：動物の飼育で子どもに育つ資質・能力＜飼育実践＞</p> <p>第7回：子どもと自然環境①：植物の観察で子どもに育つ資質・能力＜観察実践＞</p> <p>第8回：子どもと自然環境②：植物の栽培で子どもに育つ資質・能力＜栽培実践＞</p> <p>第9回：子どもと自然環境③：地の遊びで子どもに育つ資質・能力</p> <p>第10回：子どもと自然環境④：水の遊びで子どもに育つ資質・能力</p> <p>第11回：子どもと自然環境⑤：火の遊びで子どもに育つ資質・能力</p> <p>第12回：子どもと自然環境⑥：風の遊びで子どもに育つ資質・能力</p> <p>第13回：子どもと自然環境⑦：科学遊びで子どもに育つ資質・能力</p> <p>第14回：授業全体のまとめ</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 毎授業の内容をテキストより予習しておくこと。</p> <p>[事後学修] 毎授業での学びをノートに整理しておくこと。高校生物の学修を含む</p>			
<p>テキスト：「幼児の環境教育論」大澤力著（文化書房博文社）、「学生版 牧野日本植物図鑑」牧野富太郎著（北隆館）</p>			

参考書・参考資料等：「心を育てる環境教育シリーズ全3巻」大澤力編著（フレーベル館）、「科学性の芽生えから問題解決能力育成へ—新学習指導要領における資質・能力の視点から—」小林辰至・大澤力編著（文化書房博文社）、「学生版 日本の動物図鑑」内田清之助ほか著（北隆館）

学生に対する評価：

平常点（20%）、小課題（30%）、レポート（50%）にて評価、60%以上を合格とする。

その他：

特になし

授業科目名： 保育内容実践研究（ことば）	単位数：2単位	選択 （幼専）	担当教員名：戸田雅美
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育内容「言葉」の指導法について、幼稚園教育要領で求められていることについて理解し、説明することができる。 ・ 理解した知識を基に、一人一人の幼児や場面に応じた指導法を考えることができる ・ 言葉の指導に関連する教材についての知識をもち、それが、幼児の言葉の発達にどのように関連するかを議論することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>保育内容の領域「言葉」について、実践的に学ぶ。言葉の領域については、特に、小学校以上の教育との関連性も高く、乳幼児期に実際にどのように実践していくかが重要な課題となっている。この授業では、保育所や幼稚園における言葉の指導の実践研究を基に、具体的な指導方法について検討する。また、「人格形成の基礎」、小学校教育との接続を示す「10の姿」と言葉との関係について説明できるようにする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：幼稚園教育要領における領域「言葉」について</p> <p>第2回：乳幼児期の言葉の発達1 言葉の準備期から一応の完成期（おおよそ3歳）まで</p> <p>第3回：乳幼児期の言葉の発達2 就学前までの言葉の発達</p> <p>第4回：新しい学力観における「言葉」の位置</p> <p>第5回：幼稚園における保育内容言葉のねらいと内容について1 伝えあうことをめぐって</p> <p>第6回：幼稚園における保育内容言葉のねらいと内容について2 言葉そのものへの関心</p> <p>第7回：幼稚園の遊び場面における言葉の育ちを支える援助の実際1 三歳児</p> <p>第8回：幼稚園の遊び場面における言葉の育ちを支える援助の実際2 四歳児</p> <p>第9回：幼稚園の遊び場面における言葉の育ちを支える援助の実際3 五歳児</p> <p>第10回：他の領域との関連</p> <p>第11回：言葉の育ちを支える環境</p> <p>第12回：言葉の育ちを支える指導計画</p> <p>第13回：小学校の学びとの連続性1 課題</p> <p>第14回：小学校の学びとの連続性2 実際</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 予習として、テキスト及び参考資料等を読んでくること。</p> <p>[事後学修] 講義を振り返り、自身にとっての新たな視点や発見・気づきをまとめておく。</p>			
<p>テキスト： 保育内容「言葉」の理解と指導法 建帛社</p>			
<p>参考書・参考資料等： 随時指示（プリント等）</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業内における議論（その準備を含む）（50%）、最終レポート（50%）</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名： 保育内容実践研究（表現）	単位数：2単位	選択 （幼専）	担当教員名：花輪 充
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育内容「表現」の指導法について、幼稚園教育要領で求められていることについて理解することができる。 ・保育者の表現活動の捉え方や指導法等について考えることができる。 ・領域「表現」における今日的課題について議論することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>領域「表現」は、音楽表現、造形表現、身体表現といった具合に、とかく分類的・狭義的に捉えられる傾向があり、「遊び」を通して統合的・自発的に内面を表出しようとする幼児たちの行動パターンと不一致を生じさせることも少なくない。本授業では、乳児期から幼児期に渡る子どもの発達と表現の特徴に焦点をあて、それぞれの時期にふさわしい表現活動について考察するとともに、保育者の受け止めと援助について明らかにしていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション 授業の概要及び授業展開について</p> <p>第2回：人間と表現について ・表現ということ ・表現の発達</p> <p>第3回：表現と「表現」について ・遊びと表現 ・領域「表現」の捉え方</p> <p>第4回：子どもと表現活動 ・表現活動と内面形成</p> <p>第5回：表現活動の役割 ・健全育成と表現活動 ・指導者の役割</p> <p>第6回：造形表現の視点から ・作る ・描く</p> <p>第7回：音楽表現の視点から ・歌う ・奏でる</p> <p>第8回：劇表現の視点から ・演じる ・扮する</p> <p>第9回：統合的表現について ・ごっこあそび ・劇遊び</p> <p>第10回：保育者と表現① ・活動と行為の視点から</p> <p>第11回：保育者と表現② ・遊びと表現活動</p> <p>第12回：表現活動の実際① ・幼稚園における事例より</p> <p>第13回：表現活動の実際② ・保育所、児童館における事例より</p> <p>第14回：まとめ ・保育者の受け止めと援助について</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 毎授業の内容をテキストより予習しておくこと。</p> <p>[事後学修] 毎授業での学びや新たな視点や発見・気づきを整理しておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>「保育・幼児教育シリーズ 表現の指導法 改訂第2版」玉川大学出版部</p>			
<p>参考書・参考資料等： そのつど授業内で紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>協議及び実技の参加（30%）プレゼンテーション（40%）レポート（30%）</p>			
<p>その他： 学外（幼稚園、保育園）での授業を実施する場合もあり。</p>			

授業科目名： 保育内容実践研究（健康）	単位数：2単位	選択 （幼専）	担当教員名：鈴木 隆
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの心身の発達や運動発達について理解し、説明できる。 ・子どもの健やかな心身の発達をささえる保育者の役割や環境構成など、実践的に考案できる。 ・子どもが楽しく体を動かす遊びを、工夫し作り出すことができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>保育内容の領域「健康」について、実践的に学修する。この領域は体を動かす運動的遊びにとどまらず、生活習慣の獲得や安全教育、食育など、保育実践に照らして考えると多岐にわたる保育内容が対象となる。この授業ではこうした幅広い内容を前提としつつ、子どもの育ちを多面的にとらえて実践のあり方について考察していく。履修者の予定を考慮しながらではあるが、学外授業として保育現場の視察を複数回実施することを検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション 授業の概要及び授業展開について</p> <p>第2回：乳幼児の心身の発達について</p> <p>第3回：乳幼児の運動発達について</p> <p>第4回：子どもに必要な動きとは、幼児期運動指針について</p> <p>第5回：運動能力の発達と運動能力検査について</p> <p>第6回：生活習慣の獲得と保育（睡眠・食育など）</p> <p>第7回：リスクマネジメントと保育</p> <p>第8回：保育実践に学ぶ 幼稚園</p> <p>第9回：保育実践に学ぶ 保育所</p> <p>第10回：保育実践に学ぶ こども園</p> <p>第11回：保育実践に学ぶ さまざまな環境</p> <p>第12回：保育実践に学ぶ 保育者の役割</p> <p>第13回：保育実践に学ぶ 行事のあり方</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 毎授業ごとに課題を提示するので、それを事前に取り組んでおくこと。</p> <p>[事後学修] 授業での学びをノートに整理するなど、自分なりに考えをまとめるよう努力すること。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>『保育実践を支える 健康〔改訂版〕』福村出版、2018年</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>その都度授業にて紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業内での課題成果および討議への参加態度（50%）、最終レポート（50%）</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名： 保育内容実践研究(人間関係)	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：岩立京子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間関係を巡る現代的課題を理解し、説明できる。 ・保育・幼児教育で保障すべき保育内容に関する知識を身に付けることができる。 ・保育内容「人間関係」の専門的事項や指導法、幼児の発達にふさわしい主体的・対話的で深い学びを実現する保育実践のあり方を基本から捉え直し、実践的研究及び研究的実践を行うことができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>現代の幼児の人間関係の育ちの実態及びその要因について理解し、保障すべき保育・教育内容についての知識を身に付ける。さらに幼稚園教育要領・保育所保育指針に示された領域「人間関係」のねらい及び内容、評価について、具体的な実践事例を通して捉え直し、理解を深める。そのうえで主体的・対話的で深い学びを実現する保育実践を探求する力を身に付ける。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： ガイダンス（保育内容 領域「人間関係」の特質および授業のねらいと計画等について）</p> <p>第2回： 現代社会と幼児の人間関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児を取り巻く環境の変化と幼児教育・保育に期待されるもの <p>第3回： 乳幼児期の人間関係の発達① 0-3歳未満児について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般的な発達、家庭での発達、保育施設（保育所・こども園等）における発達 <p>第4回： 乳幼児の人間関係の発達② 3-5歳児について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般的発達、集団保育（幼稚園・保育所・こども園等）における発達 <p>第5回： 幼稚園等施設における領域「人間関係」のねらいと内容の意義</p> <p>第6回： 幼児期における社会・情動の発達</p> <p>第7回： 保育所・認定こども園における「人間関係」の育ちを支える援助の実際① 3歳未満児</p> <p>第8回： 幼稚園・保育所における「人間関係」の育ちを支える援助の実際② 3歳児</p> <p>第9回： 幼稚園・保育所における「人間関係」の育ちを支える援助の実際③ 4歳児</p> <p>第10回： 幼稚園・保育所における「人間関係」の育ちを支える援助の実際④ 5歳児</p> <p>第11回： 幼稚園教育要領・保育所保育指針における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と領域「人間関係」</p> <p>第12回： 幼児期の「道徳性・規範意識の芽生え」の育ちと指導を探る</p> <p>第13回： 幼児期の「協同性」の育ち 一個と集団の関係から探る</p> <p>第14回： 授業の総括と今後の課題</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 事前課題レポートを作成する。</p> <p>[事後学修] 授業内容をまとめる。</p>			
<p>テキスト： 無藤隆・岩立京子編著「保育内容『人間関係』」萌文書林、その他適宜、資料を配布。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>幼稚園教育要領解説・保育所保育指針解説・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説</p>			

学生に対する評価：

議論への参加 (30%) 課題レポート (30%) 最終レポート (40%)

その他：

特になし

授業科目名： 育児支援学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：浜口順子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・院生一人一人が自らの「育児支援」観を構成する情報や価値観に気付くことができる。 ・現実に即した育児支援の在り方を批判的に検討する力を養うことができる。 ・人間社会において協働して育児することの意義を問うことができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>社会的保育、子を預かるということに関する世の中の価値観、先入観について考えるために、マスコミや学問における通説、言説を概観し、それらが歴史的にいかにか形成されてきたのか、日本文化の特性があるのかなどを問い、育児や育児支援というものへのイメージを主体的に再構成することを目指す。そのために、ディスカッションや自主研究・発表をとおして主体的対話的な授業を行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： オリエンテーション 人が子育てするという事</p> <p>第2回： マスコミで問題となっている日本の育児問題</p> <p>第3回： 保護者とは誰のことか（生物学的、法的、社会学的、心理学的、保育学的）</p> <p>第4回： 子どもの権利条約における親・保護者</p> <p>第5回： 育児支援の歴史1（明治期）</p> <p>第6回： 育児支援の歴史2（大正～戦前）</p> <p>第7回： 育児支援の歴史3（戦後）</p> <p>第8回： 現代の親・保護者の問題（データを読む）</p> <p>第9回： 現代の親・保護者の問題（ディスカッション）</p> <p>第10回： 海外の育児支援1（欧米）</p> <p>第11回： 海外の育児支援II（アジア他）</p> <p>第12回： メディアの中の育児支援</p> <p>第13回： 育児支援に関する自主研究発表1</p> <p>第14回： 育児支援に関する自主研究発表2</p>			
<p>授業外学習：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 人間が育児することと「支援」というワードがどういう関係をもつのか、まとめておくこと。</p> <p>[事後学修] 関心のある記事をネットや雑誌などから収集しファイリングすること。</p>			
<p>テキスト：特に指定しない。必要に応じて資料等配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 加藤邦子・浜口順子ほか編『子どもと地域と社会をつなぐ家庭支援論』福村出版、2015年</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>リアクションペーパー（30%）、自主研究等への参加態度（40%）、最終レポート（30%）</p>			
<p>その他： 毎回授業後に提出するリアクションペーパーをメールで提出し、受講生で共有し、授業の省察に活かします。</p>			

授業科目名： 育児支援学演習	単位数：2単位	選択	担当教員名：太田光洋
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代社会における育児支援の意義と役割について理解できる。 ・育児支援をめぐる施策や事業、実践現場での諸課題について資料収集と議論を通して、育児支援のあり方とその実践を構想・実現する専門的能力を習得することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>児童学児童教育学専攻の学位授与方針に基づき、育児支援に関する政策、事業とその実践事例や課題の検討を通して、社会的ニーズをふまえ子どもの最善の利益に資する育児支援の基本理念とその実践のあり方について学びを深める。また、育児支援を園内や地域での連携や協働のあり方について、園経営、保育者のキャリアパスという観点から検討する。この授業の進め方としては、育児支援に関する実践事例、実践記録や論考、データ等を収集、報告し、議論を中心に展開し、研究的実践の基礎力を身につける。また、必要に応じて実践現場の観察、実践者へのインタビューなどの機会を設ける。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション、「育児支援」とは何か</p> <p>第2回：育児支援の成り立ちと背景</p> <p>第3回：わが国の保育施策と育児支援の変遷</p> <p>第4回：育児支援の今日的課題</p> <p>第5回：現代の子育てと母子関係</p> <p>第6回：求められる支援内容と課題</p> <p>第7回：地域子育て支援センター等における育児支援</p> <p>第8回：保育所・幼稚園・認定こども園における育児支援（在園児の保護者への支援）</p> <p>第9回：保育所・幼稚園・認定こども園における育児支援（地域の保護者への支援）</p> <p>第10回：保育者の専門性と育児支援の具体的内容、保育を基礎とした育児支援</p> <p>第11回：育児支援にかかわる地域や専門家の協働</p> <p>第12回：支援者の育成、支援とキャリアパス</p> <p>第13回：支援者が抱える悩み、保育者を支える支援ネットワーク、支援者支援</p> <p>第14回：育児支援の充実のために求められる組織運営</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 毎回の授業に関する資料収集と整理をする。</p> <p>[事後学修] レジユメの作成を行う。</p>			
<p>テキスト： 『子育て支援の理論と実践』（保育出版会）、その他随時資料等を配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 『現代の子育て・母子関係と保育』（ひとなる書房）、『よくわかる子育て支援・家庭支援論』（ミネルヴァ書房）</p>			
<p>学生に対する評価： レジユメ作成（30点）、授業内での発表と討論（40点）、レポート（30点）</p>			
<p>その他：</p> <p>特になし</p>			

授業科目名：児童福祉学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：岩崎美智子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>この授業では、二つのテーマについて社会学的な観点から講義する。一つは、現代社会に生きる子どもと家族の問題とそれらに対する福祉的対応、保育者の援助について検討する。二つ目は、保育者の生活史について、ライフヒストリー・ライフストーリー等の手法をもちいて考察する。到達目標は以下の事項である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料やデータ、語りなどを素材として議論を重ねながら、問題の発見、分析の方法を理解することができる。 ・特定の課題を探究していく力を修得することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>上記二つのテーマについて、毎回問題提起をするが、受講者とともに討議しながら授業を進める。前半は、①子どもや家族が直面している問題の実態把握と検証、②子どもや家族を支える援助者としての保育者の困難や感情労働、および「ケアすること」や「支援すること」についても整理し、問い直しを試みる。後半は、保育者の実践や人生について、ライフヒストリー研究やライフストーリー研究に学びながら、文献や調査データ、語りをもとに論じる。保育者たちの保育・養護実践や人間性を多面的に理解することをめざす。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：現代社会における子どもと家族の問題</p> <p>第2回：その1 子ども虐待</p> <p>第3回：その2 子どもの「自立」</p> <p>第4回：問題への対応—ケアと支援</p> <p>第5回：その1 レジリエンスとエンパワメント</p> <p>第6回：その2 児童養護施設における自立支援</p> <p>第7回：その3 保育所における親子支援</p> <p>第8回：その4 支援が難しい親たち</p> <p>第9回：その5 援助することの難しさ—感情労働について</p> <p>第10回：ライフヒストリーとライフストーリー</p> <p>第11回：その1 保育者の戦中と戦後</p> <p>第12回：その2 戦後の保育所保母の実践</p> <p>第13回：その3 戦後の施設保母の実践</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 予習としては、翌週の講義のために資料を事前配布するので、必ず目を通し質問を考えておくこと。</p> <p>[事後学修] 復習としては、その日の講義のポイントや議論になった点を整理しておくこと。</p>			
<p>テキスト： 特に指定しない。随時、資料を配布する。</p>			

参考書・参考資料等： 上野千鶴子『ケアの社会学』太田出版

学生に対する評価：

討議への意欲・発表等（30%）、予習・復習（30%）、レポート・課題（40%）として総合的に判断する。

その他： 受講者の発表や課題・レポートについては、授業内にコメントする。受講者が意欲をもって積極的に議論に参加することを期待する。

授業科目名：児童福祉学演習	単位数：2単位	選択	担当教員名：松本なるみ
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>この授業では児童福祉領域における児童養護の今日的な問題を扱う。到達目標は以下の4点である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童養護問題について当事者である子どもだけではなく、その家族や地域社会、制度や施策といった複数の視点からの確に捉えて述べることができる。 ・児童養護問題発生の背景について社会の状況も踏まえて指摘することができる。 ・児童福祉の「対象」としての子どもではなく「権利主体」としての子どもという児童福祉法に示された子どもの位置づけを理解し具体化した支援について提案することができる。 ・レジュメを作成しわかりやすく説明すること及び積極的に討議に参加することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>児童養護の今日的な問題における4つのテーマを中心に演習を進めていく。基本文献や資料をもとに、現代の子どもを取り巻く環境や社会状況と関連させながら児童養護問題の現状を把握し、複数の視点から検討し理解を深める。また、児童福祉法や4つのテーマに関する基本文献の解説（教員）・先行研究の講読（院生）、報告者と教員・院生間の議論をとおして、子どもが育つプロセスを理解し子どもを「権利主体」とした具体的な支援についても考えていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：児童養護問題の現状把握と理解</p> <p>第2回：基本文献の解説・先行研究の講読（1）児童虐待</p> <p>第3回：児童虐待に関する先行研究・文献の報告</p> <p>第4回：児童虐待に関する先行研究・文献報告を踏まえての討議</p> <p>第5回：基本文献の解説・先行研究の講読（2）子どもの貧困</p> <p>第6回：子どもの貧困に関する先行研究・文献の報告</p> <p>第7回：子どもの貧困に関する先行研究・文献報告を踏まえての討議</p> <p>第8回：基本文献の解説・先行研究の講読（3）社会的養護を必要とする子どもと家族</p> <p>第9回：社会的養護を必要とする子どもと家族に関する先行研究・文献の報告</p> <p>第10回：社会的養護を必要とする子どもと家族に関する先行研究・文献報告を踏まえての討議</p> <p>第11回：基本文献の解説・先行研究の講読（4）子どもの権利擁護</p> <p>第12回：子どもの権利擁護に関する先行研究・文献の報告</p> <p>第13回：子どもの権利擁護に関する先行研究・文献報告を踏まえての討議</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 各回のテーマについて報告する担当者を決めるので、レジュメの作成を課題とする。報告担当ではない学生も課題文献を読んでおく。</p> <p>[事後学修] 事後学習は、報告を聴いて気づいたこと、討議をとおして考えたことを毎回記録して、最終回のまとめの授業で報告できるようにしておく。</p>			
<p>テキスト： テーマに応じて文献案内と資料を配布する。</p>			

参考書・参考資料等：

授業時に適宜提示する。

学生に対する評価：

授業・討議への参加（50%）、レジュメ作成等提出課題の内容（50%）

その他：

特になし

授業科目名： 保育カウンセリング特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：武田洋子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>相談を受けることで他者を支援するためには、自己と支援対象の理解及び面接態度や技術の習得が必要である。従って、この授業では以下の3点を到達目標とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己（保育者自身）と支援対象（保護者、親子）に関する理解を深めることができる。 ・保護者面接において必要な態度と技術を習得することができる。 ・援助全体の中での保護者面接の果たす役割を説明することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>保育現場での保護者支援における保護者面接は、面接のみで支援として成立するというよりは、保育の中で多方向かつ多面的に行われるチーム援助の中の一手法として機能するものと考えられる。従って、本授業では、保護者面接に必要な態度や技術を取り上げるだけでなく、支援全体を俯瞰し、園内、園外の他の援助と連動して有意義な支援となるための保育者による保護者面接のあり方、という視点を重視する。授業は演習（グループワーク、ロールプレイ）や事例を取り入れながら進める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：保育現場で行う保育者ならではのカウンセリングとは何か</p> <p>第2回：さまざまな親面接の方法</p> <p>第3回：親子に対する理解を深める （1）生涯発達からみた乳幼児を育てる親</p> <p>第4回：親子に関する理解を深める （2）子どもの心理発達に関する諸理論からみた親子</p> <p>第5回：親子に関する理解を深める （3）保育場面における気になる親子</p> <p>第6回：自己に対する理解を深める （1）自己理解を深めるために役立つ視点</p> <p>第7回：自己に対する理解を深める （2）心理テストから見た自己理解</p> <p>第8回：実践のための技術を学ぶ （1）援助全体における保護者面接の位置づけと役割</p> <p>第9回：実践のための技術を学ぶ （2）面接者としての基本的態度と技術の整理</p> <p>第10回：実践のための技術を学ぶ （3）インテーク面接</p> <p>第11回：実践のための技術を学ぶ （4）ロールプレイ1</p> <p>第12回：実践のための技術を学ぶ （5）ロールプレイ2</p> <p>第13回：実践のための技術を学ぶ （6）ロールプレイから自身の応答傾向を知る</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 毎授業の内容に関する予習をする。</p> <p>[事後学修] 授業内に提示する課題に取り組む。</p>			
<p>テキスト： なし</p>			
<p>参考書・参考資料等： 授業中に適宜紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価： 平常点（授業への取り組みの積極性）（20%）、授業中に課すリアクションペーパー（40%）、課題レポート（40%）</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名： 保育相談演習	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：金城 悟
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>保育相談が必要な保育現場の状況分析をもとにケアワーク、ケースワーク、カウンセリング、ケースカンファレンス等の基礎的な支援技術を学修した上で、以下の2点を到達目標とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の専門性、保育者の協働等について理解を深めることができる。 ・さらに、探究できる能力を身につけることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>保育現場において保育相談が必要とされる現代社会の現状と課題を理解し、保育相談に関する基礎的知識及び支援技術を文献・各種資料及び保育現場での実践を通して学ぶ。さらに、保育現場における保育相談の展開を体験し、保育相談の目的と保育者の役割について実践課題の分析と議論を重ねながら理解を深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション 授業計画の説明、授業概要、保育相談の目的と意義</p> <p>第2回：保育相談の対象と課題</p> <p>第3回：子どもの最善の利益の実現と人権を守ることの意義</p> <p>第4回：保育相談のプロセス①ケースワークの基礎理論</p> <p>第5回：保育相談のプロセス③保護者支援の計画・記録・評価</p> <p>第6回：フィールドワーク①幼稚園における保育相談</p> <p>第7回：フィールドワーク②保育施設における保育相談</p> <p>第8回：フィールドワーク③子育て支援施設における保育相談</p> <p>第9回：保育カンファレンスの基礎理解</p> <p>第10回：保育カンファレンスにおける保育者及び他専門職との連携・協働</p> <p>第11回：保育相談における事例検討①障がいのある子ども</p> <p>第12回：保育相談における事例検討②被虐待児</p> <p>第13回：保育相談における事例検討③課題を抱えた保護者への対応</p> <p>第14回：授業の振り返りとまとめ</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 指定された事前課題について取り組み、授業における討論に備える。</p> <p>[事後学修] 授業で得た知見や気づき・発見をノート等に整理する。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>なし。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>適宜紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点(30%)、事前学修・事後学修課題(20%)、演習課題(50%)</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名： 家族関係学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：平野順子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>乳幼児・児童とその家族を取りまく様相は、時代によって変化している。現代においては、家族の多様化・価値観の多様化と相まって、さまざまな家族関係が存在する。本授業では、それらのことをふまえ、以下の3点を到達目標とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その現状とそれに配慮した保育・教育、保護者支援について理解することができる。 ・家族を見つめる洞察力・研究能力を向上させることができる。 ・実践の場における応用について考えることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>乳幼児・児童とその家族を取り巻く問題について、さまざまな論文・文献やデータや事例より、その問題点を整理し、対応、支援の実際について検討する。また、子どもと家族を支える地域資源の事例から、現場で抱える家族関係の現状について把握し、よりよい支援について考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション（授業の進め方と学生の興味関心について）</p> <p>第2回：今日の子どもと家族を取り巻く社会環境</p> <p>第3回：今日の親と家族を取り巻く社会環境</p> <p>第4回：政府統計データから見た日本の家族とその支援</p> <p>第5回：子どもと家族を支える地域資源 ①子育てを支える</p> <p>第6回：親としての発達</p> <p>第7回：子どもと家族を支える地域資源 ②妊娠中から支える</p> <p>第8回：子どもの居場所</p> <p>第9回：「家族」の客観的な把握</p> <p>第10回：事例検討 ①子どもへの対応</p> <p>第11回：事例検討 ②保護者への対応</p> <p>第12回：諸外国における家族と子育て</p> <p>第13回：家族研究の方法</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 基本的に毎回、論文・文献からの示唆、テーマに関する課題、発表準備等を行う。</p> <p>[事後学修] 授業で得た知見と、気づきや発見をノート等に整理する。</p>			
<p>テキスト： 授業中に指定します</p>			
<p>参考書・参考資料等： 授業中に指定します</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>毎回の授業の準備、発表（50％）、授業での討論（20％）、実践発表（30％）の総合評価</p>			
<p>その他：</p> <p>学外に出かける時には、授業時間外となる可能性も高い。</p>			

授業科目名：子ども臨床学特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：(オムニバス) 宮島 祐・阿部 崇
<p>授業の到達目標及びテーマ：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達と行動特性についての理解を深め、列挙することができる。 ・子どもを育む上で有用となるスキルと関連職種との連携の実際を修得する。 			
<p>授業の概要</p> <p>昨今、幼児期から学齢期を含め「問題行動・気になる子」が増えていると話題になっている。児童学児童教育学専攻の学位授与方針に基づき、この講義では医学的見地と教育学的見地の両面からオムニバス方式にて学びを深め、連携の実際を習得する。前期は医学的見地から神経発達症群の概念に至った経緯、および保育・教育の現場で問題となっている現状を鑑み、事例を交えての理解と対応について学修する。後期は教育学的見地から知的障害児教育の歴史の変遷に加え、事例を取り上げて「個別の指導計画」の作成、さらに教材・教具の作成により理解を深める。また実際の授業を視聴し、授業分析の視点や評価の視点について検討する。講義時にはミニレポートの作成やグループディスカッションを取り入れて、知識の定着を図る。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：微細脳機能障害症候群から神経発達症群（発達障害）に至る歴史の変遷（宮島）</p> <p>第2回：乳幼児期に「気になる子」とは？（宮島）</p> <p>第3回：学童期の「問題行動」とは？（宮島）</p> <p>第4回：注意欠如・多動症の検査と評価（宮島）</p> <p>第5回：自閉スペクトラム症の検査と評価（宮島）</p> <p>第6回：発達性協調運動障害の検査と評価（宮島）</p> <p>第7回：神経発達症群（発達障害）の治療の実際（宮島）</p> <p>第8回：知的障害児教育の歴史の変遷（阿部）</p> <p>第9回：「個別の指導計画」の実際・作成（阿部）</p> <p>第10回：知的障害児教育における教材・教具の実際（阿部）</p> <p>第11回：知的障害児教育における教材・教具の製作（阿部）</p> <p>第12回：知的障害児教育における授業研究（阿部）</p> <p>第13回：授業研究における分析の視点とその評価（阿部）</p> <p>第14回：知的障害児教育における「合理的配慮」（阿部）</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 毎回の受講前に図書館等で下記参考書・資料に目を通しておくこと。</p> <p>[事後学修] 授業で得た知見と、気づきや発見をノート等に整理する。</p>			
<p>テキスト： 特に指定しない。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 講義の進行状況に合わせて適宜提示する。宮島担当分「注意欠如・多動症の診断・治療ガイドライン第4版（じほう）」「精神障害の診断と統計マニュアル第5版（DSM-5）」</p>			
<p>学生に対する評価： 授業への参加態度（30%）課題への取り組み（40%）レポート（30%）</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名：子ども臨床学演習	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：野澤純子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>・保育所や幼稚園などの保育現場における具体的な事例から、特別なニーズのある子どもへの臨床保育の基本的な概念を整理することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>この授業では、保育所や幼稚園などの保育現場で出会う、様々な臨床的な問題に取り組む際に問題となる課題について、具体的な事例を検討することを通して、特別なニーズ児への臨床保育の基本的な概念を整理し、園内外での取り組み方についてその基本的な考え方について学んでいく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：特別なニーズのある子どもとは</p> <p>第2回：保育巡回相談の意義と役割</p> <p>第3回：特別支援保育における園内の体制づくりと進め方</p> <p>第4回：特別支援保育における記録とカンファレンスの在り方</p> <p>第5回：特別なニーズのある子どもの保護者との連携の進め方</p> <p>第6回：関連諸機関との連携</p> <p>第7回：保育巡回相談の事例検討（1）発達障害児への取り組み</p> <p>第8回：保育巡回相談の事例検討（2）その他の障害児への取り組み</p> <p>第9回：保育巡回相談の事例検討（3）気になる子どもへの取り組み</p> <p>第10回：保育巡回相談の事例検討（4）園内の保育の見直しへの取り組み</p> <p>第11回：保育巡回相談の事例検討（5）関連諸機関との協働的な取り組み</p> <p>第12回：保育巡回相談の事例検討（6）保護者支援への取り組み</p> <p>第13回：保育巡回相談の事例検討（7）小学校との協働的な取り組み</p> <p>第14回：保育巡回相談の事例検討（8）地域の人々のサポート</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 毎授業前の課題について調べてくる。</p> <p>[事後学修] 毎授業後には、その授業での学びについて報告書を作成する。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>未定</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業時に紹介、配布する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>授業への参加態度（30%）課題への取り組み（30%）レポート（40%）の3面から評価する。</p>			
<p>その他：</p> <p>特になし</p>			

授業科目名： 小児健康保健学特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：岩田 力
授業の到達目標及びテーマ ・乳幼児、学童、生徒の心身の発達の過程を把握し、正常とは何か、健康とは何かについて考察し評価することができる。			
授業の概要 乳幼児・小児期の子どもたちの健全な発育発達にかかわるさまざまな生物学的現象を Illingworth の名著 Normal Child の輪読を通して検討していく。またそうした検討を通して、乳幼児・小児期の子どもたちの発育、発達を支援する保健学的な視点についても、具体的に考えていく。例えば受講生が経験した子どもの発育や発達に関わる問題について、受講生間の議論を通して考察を加えていく。			
授業計画 第1回： 授業計画の説明。ノーマルチャイルド輪読の割り振り。 第2回： 母乳栄養について（医学的側面の概説）。 第3回： 正しい母乳栄養と離乳。 第4回： 「授乳・離乳支援ガイド」について。 第5回： 受講者のこれまでに学んだ子どもの保健についての知識の整理。 第6回： ノーマルチャイルド輪読①（受講者の選択した章） 第7回： ノーマルチャイルド輪読②（受講者の選択した章） 第8回： ノーマルチャイルド輪読③（受講者の選択した章） 第9回： 輪読①に関連した文献抄読 第10回： 輪読②に関連した文献抄読 第11回： 輪読③に関連した文献抄読 第12回： 子どもに見られる症状、及び発達の評価について。 第13回： 受講者のこれまでの経験を踏まえて、子どもにおける正常とは何かを議論、考察する。 第14回： 全体のまとめ。			
授業外学修：（各100分程度） [事前学修] 受講者が学部生の時に学んだ、健康あるいは保健に関する教科書を通読しておくこと。 [事後学修] 授業での学びを、ノート等に整理する。			
テキスト： R.S. イリングワース著、ノーマルチャイルド（山口規容子訳）、メディカル・サイエンス・インターナショナル			
参考書・参考資料等： 授乳・離乳の支援ガイド			
学生に対する評価： 平常点（30％）文献の読解力（30％）議論を組み立てる思考力の評価（20％）レポート（20％）			
その他： 授業計画第2回～第4回は母乳栄養をトピック的に上げているが、受講者の興味、希望によっては、他の医学的な話題について解説をすることもある。			

授業科目名： 小児健康保健学特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：及川郁子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの健康の維持・促進に関わる基本的概念を理解することができる。 ・子どもや親、家族の健康支援者となるための実践能力を高めることができる。 ・健康課題に対する研究的視点を持つことができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>子ども一人ひとりの健康を維持・促進することは、子どものLifeを豊かにするものである。本授業では、特に医療を要する子どもの健康に関わる基本的概念について理解を深めるとともに、子どもの発育と健康状態をアセスメントする視点を明らかにする。また、実践現場での事象や文献を通して、医療を要する子どもの健康について、家族、地域、社会との絡みの中で検討し、具体的支援内容について考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション：コースワークの説明</p> <p>第2回：子どもの健康の概念（プライマリケア、ヘルスプロモーション、ヘルスリテラシー）</p> <p>第3回：子どもの権利（医療を要する子どもの意思決定、代諾とは）</p> <p>第4回：健康教育とプレパレーション</p> <p>第5回：子どものセルフケアと自立</p> <p>第6回：子どもの健康と保健・医療、福祉、教育との関連</p> <p>第7回：乳児期にある子どもの健康</p> <p>第8回：乳児期にある子どもと家族の健康支援</p> <p>第9回：幼児期にある子どもの健康</p> <p>第10回：幼児期にある子どもと家族への健康支援</p> <p>第11回：学童・思春期にある子どもの健康</p> <p>第12回：学童・思春期にある子どもと家族への健康支援</p> <p>第13回：成人への移行支援</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>時間外学習：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] コースワークに沿って授業準備、資料作成を行う。</p> <p>[事後学修] 既習の子どもの保健に関する内容を復習しておく。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>特に指定しない</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>適宜提示する</p>			
<p>学生に対する評価： セミナー資料と討議への参加（70％）、レポート（30％）</p>			
<p>その他：内容は履修生の状況により変更することがある。</p> <p>*本科目は通年で実施する予定（隔週開講）</p>			

授業科目名： 小児健康保健学演習	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：高野貴子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康な子どもの成長と発達について述べることができる。 ・疾病や障害をもつ子どもの理解を深め、その特徴を述べることができる。 ・疾病や障害をもつ子どもの支援方法を考えることができる。 ・子どもの健康を阻害する諸問題を述べることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>小児保健に関する知識をさらに深め、人が生まれて育つ過程とその健全な育成を妨げる諸問題を、文献や討論などを通して学究する。多角的に子どもの健康問題にアプローチできる学習を行う。概説の後、各人がテーマを調べ、発表する形式を取る。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：イントロダクション、小児保健の到達度チェック</p> <p>第2回：文献検索の方法、学術論文の規定の概説、課題の選択</p> <p>第3回：健康指標と課題の発表</p> <p>第4回：母子健康手帳</p> <p>第5回：プレゼンテーションと討論 (1) 疾病</p> <p>第6回：障がい</p> <p>第7回：先天異常と遺伝</p> <p>第8回：染色体異常、ダウン症候群</p> <p>第9回：出生前診断、生殖補助医療</p> <p>第10回：プレゼンテーションと討論 (2) 障がい</p> <p>第11回：予防 (感染症、がん)</p> <p>第12回：予防 (事故)</p> <p>第13回：学術論文検索、抄読</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修： (各100分程度)</p> <p>[事前学修] 授業前に各人が選んだ課題を調べる。プレゼンテーションの準備を進めておく。</p> <p>[事後学修] レジュメを作成する。課題終了時にレポートを作成する。</p>			
<p>テキスト： 授業内でそのつど紹介する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 国民衛生の動向 (最新版)、「小児科学」第10版 (文光堂)</p>			
<p>学生に対する評価： 予習・復習のノート (10%)、課題への積極的取り組み及びレポート (60%)、授業態度・発表ならびに他者の発表への建設的質問 (30%)</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名： 小児健康保健学演習	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：細井 香
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの健康に関する包括的な知識を修得することができる。 ・子ども・保護者支援の実践者としての専門的知識と能力、探求心を獲得することができる。 			
授業の概要 <p>小児健康保健学特論での知識をさらに深め、乳幼児・小児期の子どもたちの発育、発達を妨げる諸問題について様々な観点から、参与観察を通して深く学ぶ。また子どもの健康に関する支援的環境の具体的方法を、創造的かつ確かな情報に基づく議論ならびに現場でのフィールドワークを通して考える。</p>			
授業計画 <p>第1回：オリエンテーション：授業の概要 第2回：：受講者の学部において学んだ小児保健学の知識の整理 第3回：子どもたちの発育・発達を妨げる諸問題について：文献検索の方法、テーマの選択 第4回：資料収集とその分析に基づく討論①：子育て環境 第5回：子育て支援センターにおける健康に関する支援的環境の創造（参与観察） 第6回：資料収集とその分析に基づく討論②：生活習慣 第7回：家庭的保育室における健康に関する支援的環境の創造（参与観察） 第8回：資料収集とその分析に基づく討論③：あそび・身体運動 第9回：保育所における健康に関する支援的環境の創造（参与観察） 第10回：資料収集とその分析に基づく討論④：児童虐待予防 第11回：乳児院における健康に関する支援的環境の創造（参与観察） 第12回：資料収集とその分析に基づく討論⑤：健康管理・健康教育・感染症対策 第13回：病児・病後児保育室における支援の在り方（参与観察） 第14回：講義のまとめ：レポートに基づく報告会</p>			
授業外学習：(各100分程度) <p>[事前学修] 事前に子どもの保健の教科書を通読しておくこと。 [事後学修] 授業で得た知見と、気づきや発見をノート等に整理すること。</p>			
テキスト： <p>特に指定しない。</p>			
参考書・参考資料等： <p>適宜、提示する。</p>			
学生に対する評価： <p>文献の読解力（30点）、授業内での発表・討論などの平常点（30点）、課題に対するレポート提出（40点）</p>			
その他： <p>特になし</p>			

授業科目名：発達心理学特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：野口隆子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児の発達と家庭や社会・文化、保育・教育の場と実践に関する理論と調査の方法を理解し、述べることができる。 ・発達心理学の視点から研究を構想し実施する力を習得することができる。 ・文献購読・発表に参加し、相手の意見を十分に聞きながら議論をすることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>子どもの発達と社会・文化との関連性について、発達心理学の主要な理論、方法論を取り上げて考える。子どもにとっての保育者や保護者、保育・教育場面や家庭場面の意味を理解し、探求する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション／発達心理学に関する文献の紹介</p> <p>第2回：乳児期の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第3回：幼児期（前期）の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第4回：幼児期（後記）の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第5回：児童期の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第6回：児童期以降の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第7回：保育・教育場面の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第8回：家庭場面の研究に関する文献購読と討議</p> <p>第9回：発達研究の方法論に関する文献購読と討議</p> <p>第10回：質的研究の方法論に関する文献購読と討議</p> <p>第11回：演習①映像、ビデオを用いた討議</p> <p>第12回：演習②データとは</p> <p>第13回：横断研究と縦断研究に関する文献購読と討議</p> <p>第14回：全体総括とまとめ</p>			
<p>授業外学修：(各100分程度)</p> <p>[事前学修] 各文献の担当者は、文献を読み、不明な点や関連する文献を調べてレジュメを作成して報告する。</p> <p>[事後学修] 担当者以外の参加者は、討議に参加し、関連する文献を調べるなどして、授業で議論されたことをまとめる。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>テキストは特に使用しない。適宜文献を紹介する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 適宜文献を紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>レジュメとレポート（60%）、討議への参加等（40%）により評価する。</p>			
<p>その他：</p> <p>特になし</p>			

授業科目名： 子ども芸術療法特論	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：(オムニバス) 池森隆虎・保坂遊・佐藤邦子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・芸術療法の意義、方法論、効果についての概要を理解することができる。 ・子どもの成長・発達や心身の健康に関連付け述べることができる。 ・芸術療法を、教育・福祉・医療分野においてどのように活用することができるか、これからの社会を見据えた芸術の社会的貢献について推察し、論述することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>現代における様々な子どもの成長・発達や心身の健康に対して、芸術表現活動がどのような手法によってどのような効果をもたらすことができるのか、それぞれの専門分野の教員によるオムニバス授業より、音楽、美術、身体的表現活動を用いた多様なアプローチを理解する。また、芸術が子どもを取り巻く教育、福祉、医療といった社会的環境の中でどのように活用することができるか検討し、乳幼児や児童をめぐる社会の多様なニーズへ対応できる専門性を身につける。</p> <p>本科目は授業内容により、板橋校舎と狭山校舎へ併用して利用しながら開講する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：様々な子どもを対象として芸術療法 (池森 保坂 佐藤)</p> <p>第2回：アートセラピーの意義と効果 (保坂)</p> <p>第3回：様々な子どもに対するアート実践 (保坂)</p> <p>第4回：アートー医療ー福祉の関係と社会的意義 (保坂)</p> <p>第5回：アートセラピーの活用を考える (ワークショップ) (保坂)</p> <p>第6回：身体活動を伴う療法の実践例 (池森)</p> <p>第7回：身体活動を伴う遊びから目的と効果を考える (池森)</p> <p>第8回：療法としての遊びを実践する上で注意すべき点とは (池森)</p> <p>第9回：野外活動からの実践例 (池森)</p> <p>第10回：音楽療法の意義 (佐藤)</p> <p>第11回：音楽療法の効果 (佐藤)</p> <p>第12回：音楽療法の実際 目的と方法、対象者への配慮 (佐藤)</p> <p>第13回：音楽療法の活用を考える (ワークショップ) (佐藤)</p> <p>第14回：まとめ「芸術の社会的貢献を考える」 (池森 保坂 佐藤)</p>			
<p>授業外学修：(各100分程度)</p> <p>[事前学修] 各回の授業に関する予習課題を行う。</p> <p>[事後学修] 授業での学びをノートに整理し、まとめておく。</p>			
<p>テキスト： 授業毎に配布</p>			
<p>参考書・参考資料等： 授業時に適宜、紹介する</p>			
<p>学生に対する評価： 平常点 (20%)、小課題 (30%)、レポート (50%)</p>			
<p>その他： 大学学部における表現系授業を履修しており、履修前にそれらの復習をまとめていることが望まれる。[子ども芸術療法演習] を合わせて履修することが望まれる。</p>			

授業科目名： 子ども芸術療法演習	単位数：2単位	選択 (幼専)	担当教員名：(オムニバス) 池森隆虎・保坂遊・佐藤邦子																												
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な芸術療法の基礎的な方法論や援助技術を習得し、それらを用いて多様な子どもの成長・発達、健康を促す表現活動の実践力を身につけ、適切な援助・支援を行うことができる。 ・多様な子どもを支援するため、社会のニーズに対応した支援プログラムや社会的活動を計画・立案し、芸術療法の具現化に向けて具体的な提案をすることができる。 																															
<p>授業の概要</p> <p>音楽、美術、身体表現を活用した様々な子どもを対象とした芸術表現活動並びに芸術療法の基礎的な方法や援助技術について理解を深める。各領域の専門分野教員によるオムニバス授業によるアクティブラーニングを通して、現代社会が課題としている様々な子どもに対する教育方法や支援について芸術療法の技法をかに活用していくことができるか、演習によって実践方法や社会的活用法について検討していく。本科目は授業内容により、板橋校舎と狭山校舎へ併用して利用しながら開講する。</p>																															
<p>授業計画</p> <table border="0"> <tr> <td>第1回：芸術療法の多様な実践</td> <td>(池森 保坂 佐藤)</td> </tr> <tr> <td>第2回：子どもの感性を解放する臨床美術</td> <td>(保坂)</td> </tr> <tr> <td>第3回：臨床美術の多彩な手法</td> <td>(保坂)</td> </tr> <tr> <td>第4回：多様な子どもに対する援助について</td> <td>(保坂)</td> </tr> <tr> <td>第5回：アートセラピーの模擬実践</td> <td>(保坂)</td> </tr> <tr> <td>第6回：身体活動を伴う遊びの実践1 動きで遊ぶ</td> <td>(池森)</td> </tr> <tr> <td>第7回：身体活動を伴う遊びの実践2 モノで遊ぶ</td> <td>(池森)</td> </tr> <tr> <td>第8回：身体活動を伴う遊びの実践3 環境づくり</td> <td>(池森)</td> </tr> <tr> <td>第9回：模擬野外活動</td> <td>(池森)</td> </tr> <tr> <td>第10回：音楽療法的アプローチ ① 身体の動き</td> <td>(佐藤)</td> </tr> <tr> <td>第11回：音楽療法的アプローチ ② 声</td> <td>(佐藤)</td> </tr> <tr> <td>第12回：音楽療法的アプローチ ③ もの</td> <td>(佐藤)</td> </tr> <tr> <td>第13回：音楽療法的アプローチ ④ 個人とグループ</td> <td>(佐藤)</td> </tr> <tr> <td>第14回：まとめ 芸術療法の実践プランニング</td> <td>(池森 保坂 佐藤)</td> </tr> </table>				第1回：芸術療法の多様な実践	(池森 保坂 佐藤)	第2回：子どもの感性を解放する臨床美術	(保坂)	第3回：臨床美術の多彩な手法	(保坂)	第4回：多様な子どもに対する援助について	(保坂)	第5回：アートセラピーの模擬実践	(保坂)	第6回：身体活動を伴う遊びの実践1 動きで遊ぶ	(池森)	第7回：身体活動を伴う遊びの実践2 モノで遊ぶ	(池森)	第8回：身体活動を伴う遊びの実践3 環境づくり	(池森)	第9回：模擬野外活動	(池森)	第10回：音楽療法的アプローチ ① 身体の動き	(佐藤)	第11回：音楽療法的アプローチ ② 声	(佐藤)	第12回：音楽療法的アプローチ ③ もの	(佐藤)	第13回：音楽療法的アプローチ ④ 個人とグループ	(佐藤)	第14回：まとめ 芸術療法の実践プランニング	(池森 保坂 佐藤)
第1回：芸術療法の多様な実践	(池森 保坂 佐藤)																														
第2回：子どもの感性を解放する臨床美術	(保坂)																														
第3回：臨床美術の多彩な手法	(保坂)																														
第4回：多様な子どもに対する援助について	(保坂)																														
第5回：アートセラピーの模擬実践	(保坂)																														
第6回：身体活動を伴う遊びの実践1 動きで遊ぶ	(池森)																														
第7回：身体活動を伴う遊びの実践2 モノで遊ぶ	(池森)																														
第8回：身体活動を伴う遊びの実践3 環境づくり	(池森)																														
第9回：模擬野外活動	(池森)																														
第10回：音楽療法的アプローチ ① 身体の動き	(佐藤)																														
第11回：音楽療法的アプローチ ② 声	(佐藤)																														
第12回：音楽療法的アプローチ ③ もの	(佐藤)																														
第13回：音楽療法的アプローチ ④ 個人とグループ	(佐藤)																														
第14回：まとめ 芸術療法の実践プランニング	(池森 保坂 佐藤)																														
<p>授業外学修：(各100分程度)</p> <p>[事前学修] 各回の授業に関する予習を行う。</p> <p>[事後学修] 授業を振り返り、課題・復習等、ノートを整理する。</p>																															
<p>テキスト： 授業毎に配布</p>																															
<p>参考書・参考資料等： 授業時に適宜、紹介する</p>																															
<p>学生に対する評価： 平常点 (20%)、小課題 (30%)、レポート (50%)</p>																															
<p>その他： 大学学部における表現系授業を履修しており、履修前にそれらの復習をまとめていることが望まれる。[子ども芸術療法特論] を合わせて履修することが望まれる。</p>																															

授業科目名：教育実践演習(国語)	単位数：2単位	選択 (小専)	担当教員名：阿部藤子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語科教育の教科内容の歴史の変遷、および現代の国語科教育の学習内容や指導法を学び、実践現場での課題を考察することができる。 ・「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」の各領域における授業場面を想定しながら小学校における国語科の学習指導について理解を深めることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>国語科教育における教科内容と指導法について考察する。まず、国語科の授業の理論と歴史、現代に要請される国語学力、授業設計や授業実践のあり方について学ぶ。国語教育の実践家の著作や実践記録を講読する。さらに具体的な授業実践を取り上げて、授業を振り返りながら授業の力量を上げるための営みについても学び、研究的実践の創造をめざす。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：学生の研究関心や問題意識について発表、意見交換する。</p> <p>第2回：国語科教育の内容の歴史の変遷について考察する。</p> <p>第3回：これからの国語教育に求められる学力について考察する。</p> <p>第4回：「読むこと」の学習における内容と指導法について考察する。</p> <p>第5回：「話すこと・聞くこと」の学習における内容と指導法について考察する。</p> <p>第6回：「書くこと」の学習における内容と指導法について考察する。</p> <p>第7回：「知識・技能」に関する内容と指導法について考察する。</p> <p>第8回：実践家の著作や実践記録を読む①芦田恵之助</p> <p>第9回：実践家の著作や実践記録を読む②斉藤喜博</p> <p>第10回：実践家の著作や実践記録を読む③青木幹勇</p> <p>第11回：実践家の著作や実践記録を読む④大村はま</p> <p>第12回：国語科の授業の考察① 小学校下学年</p> <p>第13回：国語科の授業の考察② 小学校上学年</p> <p>第14回：まとめの発表・振り返り</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>[事前学修] テキストや配付された資料を読んで重要事項や疑問点やなどを整理しておく。(100分) [事後学修] 各自の関心に沿って資料・文献を探し熟読、考察する。(100分)</p>			
<p>テキスト： 阿部藤子・益地憲一編著(2018)「小学校国語科教育法」建帛社</p>			
<p>参考書・参考資料等： 益地憲一・国語教育実践理論研究会編(2018)「対話的に学び『きく』力が育つ国語の授業」明治図書、澤本和子・授業リフレクション研究会(2016)「国語科授業研究の展開—教師と子どもの協同的授業リフレクション研究—」東洋館出版</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>課題についてのレポート、発表、振り返りの状況で60%、学期末レポート40%</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名：教育実践演習（算数）	単位数：2単位	選択 (小専)	担当教員名：家田晴行
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体的な算数の事例を基に、授業における予想される児童の反応と対応策を考えることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>授業における児童の「分からない」状況が、どのようなことに起因することなのか、またそのための対応策は如何にあるべきか、を究明することは実践研究者の永遠の課題でもある。児童が混乱をきたす典型的な算数科の課題について、その教材の分析や解釈を通して対応策や指導方法の工夫をゼミ形式で討論していく。また、実際の授業における検証を行っていくとともに、新しい指導法や教材開発の進め方等について探究する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：本講座の趣旨と進め方（目的と方法の確認）</p> <p>第2回：乗法の意味（累加と倍概念）の指導と関連性</p> <p>第3回：小数と分数の指導先行に関する考え方と扱い方</p> <p>第4回：量としての分数と数としての分数をまとめて指導することの意味</p> <p>第5回：分数×整数、分数÷整数先行とかけ算先行での取り扱いの違い</p> <p>第6回：筆算と暗算の意味の違いと取り扱う範囲</p> <p>第7回：量としての「角」と図形としての「角」の扱い</p> <p>第8回：三角形の面積の先行と平行四辺形の面積先行の指導の違い</p> <p>第9回：図形の概念形成と概念達成</p> <p>第10回：空間概念と空間観念の違いについて</p> <p>第11回：授業観察の手法と記録の仕方</p> <p>第12回：算数の授業観察の実際とその分析</p> <p>第13回：改善指導案の作成と教材の開発</p> <p>第14回：まとめ（本講座における知見についての小論文作成）</p>			
<p>授業外学修：(各100分程度)</p> <p>[事前学修] 事前に渡す論文や資料を読んで内容を解説できるようにしておくこと。</p> <p>[事後学修] 受講者で話し合った指導内容等を受け、各自授業改善に関してまとめておく。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>小学校算数「授業力をみがく」（啓林館）</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>学習指導要領、小学校算数教科書「わくわく算数（啓林館）」、小学校算数教科書「新しい算数（東京書籍）」</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点（10%）、レポート（50%）、テスト（40%）で評価する。</p>			
<p>その他：</p> <p>特になし</p>			

授業科目名：教育実践演習(社会)	単位数：2単位	選択 (小専)	担当教員名：二川正浩
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦後から今日に至る社会科教育の目標や内容、方法論の変遷についての考察を行い、今日社会科教育の意義と課題について述べるができる。 ・地域素材の教材化を通して、児童が主体的に学ぶための授業構成の理論と方法、授業分析と評価の方法に関する教育実践の手法を身につけることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>戦後から今日に至る具体的な授業実践を取り上げながら社会科教育の目標や内容、方法論についての理解を深め、今日の学校現場における社会科教育の意義と課題についての考察を行う。次に、その課題の解決を念頭に、学習指導要領の改定の趣旨を踏まえて、地域学習を事例としながら小学校社会科における授業構成の理論と方法についての理解を深める。そして、これからの社会科教育の在り方について、授業分析や評価方法についての理論や方法への理解を図りながら、児童の主体的な学びという観点からの考察を行い、教育現場で求められる研究的実践の方法を修得していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス 社会科の誕生と教育の目標</p> <p>第2回：学習指導要領に見る社会科の学習内容と方法の変遷</p> <p>第3回：初期社会科における代表的な教育実践事例</p> <p>第4回：初期社会科における教育実践の課題</p> <p>第5回：系統的な学習と社会科教育の授業構成の理論と方法</p> <p>第6回：新学力観と社会科教育の授業構成と理論の方法</p> <p>第7回：知識基盤社会で求められる社会科教育の在り方と課題</p> <p>第8回：平成29年度版学習指導要領における社会科の改訂の趣旨</p> <p>第9回：平成29年度版学習指導要領における小学校社会科の授業構成の理論と方法</p> <p>第10回：小学校社会科における地域素材の活用と地域学習の意義</p> <p>第11回：社会認識を育てるための地域素材の教材化による授業構成の理論と方法</p> <p>第12回：授業分析と授業の評価方法についての理論</p> <p>第13回：児童の主体的な学びから見る社会科教育のこれからの課題</p> <p>第14回：まとめと解説</p>			
<p>授業外学修：(各100分程度)</p> <p>[事前学修] 各講義における考察や実践に必要な基礎的知識の習得や地域調査、学習指導案の作成などに関する小課題に取り組む。 [事後学修] 各講義での考察や実践を通して、その考察や実践をさらに深化するための問題意識や方策等に関する小課題に取り組む。</p>			
<p>テキスト： 日本社会科教育学会出版プロジェクト編「新時代を拓く社会科の挑戦」第一学習社</p>			
<p>参考書・参考資料等： 必要に応じて参考書や参考資料を紹介、配布。</p>			
<p>学生に対する評価： 小課題 (60%)、レポート (40%)</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名：教育実践演習(理科)	単位数： 2単位	選択 (小専)	担当教員名：大澤 力
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 探究する資質・能力を育む理科教育を実践する為の知識と実践力を獲得することができる。 ・ 新学習指導要領における核心となる科学性の芽生えから問題解決能力育成の本質を理論と実践を通して理解することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>小学校の学習指導要領「理科」で述べられている教育内容を尊重すると共に、特に探究するための資質・能力の育成に主眼を置きつつ学修を展開する。そのため、理科の探究力を実感すべく、日常教育でも活用できる身近な自然環境との関わりを取り入れた体験学習や課題レポートを多く取り入れ、理論と実践を結びつけたところでの学びを重視する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：はじめに 小学校（理科）学習指導要領の重要性 日本と西欧の自然観と科学 第2回：科学的に探究（問題解決）する資質・能力の基礎となる原体験 第3回：原体験が自然の事象を因果関係で捉える力に及ぼす影響 第4回：仮説を立てる力を育む指導方略【The Four Question Strategy(4QS)】 第5回：【The Four Question Strategy(4QS)】で仮説を設定する際に働く推論 第6回：観察と実験で異なる科学的な探究（問題解決）の過程 第7回：日本の理科教育に即した日本版プロセス・スキルズ「探究の技能」の開発 第8回：観察と実験の問いの立て方と探究（問題解決）の方法と特徴 第9回：【The Four Question Strategy(4QS)】の小・中学校の観察・実験等への適用の可能性 第10回：小学校中学校の子供を対象とした【The Two Question Strategy(2QS)】仮説設定シートの開発と小学校理科教科書の観察・実験等への適用の可能性 第11回：観察と実験による探究（問題解決）の特徴と「探究の過程の8の字型モデル」 第12回：身近な自然の教材で科学的に探究する力と態度を育成するータンポポを事例としてー 第13回：「理科」における「21世紀に求められる資質・能力」の「思考力」の捉え方 第14回：授業全体のまとめ・我が国の理科教育の課題と解決に向けての展望</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 毎授業の内容をテキストより予習しておくこと。</p> <p>[事後学修] 毎授業での学びをノートに整理し、まとめておくこと。高校生物の学修を含む</p>			
<p>テキスト： 「探究する資質・能力を育む 理科教育」小林辰至編著（大学教育出版）</p>			
<p>参考書・参考資料等： 「科学性の芽生えから問題解決能力育成へー新学習指導要領における資質・能力の視点からー」小林辰至・大澤力編著（文化書房博文社）</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点（20%）小課題（30%）レポート（50%）にて評価し、60%以上を合格とする。</p>			
<p>その他： 特になし</p>			

授業科目名：教育実践演習(音楽)	単位数：2単位	選択 (小専)	担当教員名：笹井邦彦
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本授業では、グローバルな音楽教育の理解と教育実践をテーマとする。到達目標は、以下の3点である。・音楽教育の世界史を理解することができる。・明治以降の音楽教育の変遷を理解し現在の音楽教育を考察することができる。・それらを踏まえ、グローバルな音楽教育の実践ができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>子どもを取り巻く音楽環境は、社会の変化や文化の変化とともに複雑化してきている。例えば、公教育における明治以来の欧米音楽一辺倒から昨今での母国音楽教育の再導入、あるいは、マスメディアの発展とともに様々な音楽環境が存在している。つまり、これらのことは今の子どもたちと音楽との関わりを考えた場合、よりグローバルな視点からの考察が必要である。そのようなことから、ここでの演習は「日本の音楽の歴史的探求」あるいは「子どもたちの音楽環境の歴史的変遷」などのルーツを紐解きながら、今の子どもたちに対する音楽教育の在り方、及び本来的な音楽教育の在り方などについて探求する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：中世以降の世界史の外観</p> <p>第2回：ルネッサンス以降の西洋音楽史の外観</p> <p>第3回：明治維新以降から昭和初期の音楽教育の外観</p> <p>第4回：昭和初期から現在までの音楽教育、及び社会的音楽教育の外観</p> <p>第5回：人にとっての音楽の脳生理学的分析</p> <p>第6回：幼児期・児童期の音楽発達</p> <p>第7回：幼児期・児童期の音楽教育メソッド（リトミック）</p> <p>第8回：幼児期・児童期の音楽教育メソッド（コダーイ）</p> <p>第9回：幼児期・児童期の音楽教育メソッド（オルフ）</p> <p>第10回：幼児期・児童期の音楽教育メソッド（創造的音楽学習）</p> <p>第11回：幼児期・児童期の音楽教育メソッド（わらべ歌）</p> <p>第12回：音楽教育実践（創造的身体表現）</p> <p>第13回：音楽教育実践（詩とメロディーの創作）</p> <p>第14回：まとめ（音楽教育のアイディア）</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 毎授業の内容を配布資料等より予習しておくこと。</p> <p>[事後学修] 毎授業での学びをノートに整理し、まとめておくこと。</p>			
<p>テキスト： 特になし。必要に応じて資料等を配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 随時紹介する</p>			
<p>学生に対する評価： 以下により評価する（平常点50%、レポート50%）</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 教育実践演習(図画工作)	単位数：2単位	選択 (小専)	担当教員名：結城孝雄
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の学習観に基づく、造形活動の活動デザインを描くことができる。 ・そのために、21世紀型教育による学習観の概要について知見を得ることができる。 ・次に、このような概要を踏まえた芸術教育、造形活動とその実践について説明することができる。 ・これらを踏まえて、授業デザインを行うことができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>21世紀型教育が世界で加速度的に進行している。この「知識・スキルを活用する」教育の流れを歴史から、内容から俯瞰しつつ、現在実施されている教育内容を世界の優れた実践から学ぶ。芸術教育、造形活動のこれからの在り方を議論で深めながら、また、具体物、作品を見学しながら、学習者に見合った具体的実践について、指導計画を立案することを目的とする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション 内容の確認 今後の実施計画</p> <p>第2回：21世紀型教育の概要と本質</p> <p>第3回：芸術教育のねらいと目的</p> <p>第4回：世界における芸術教育</p> <p>第5回：これまでの内容に対する議論（21世紀型教育と芸術教育のかかわり方）</p> <p>第6回：これまでの内容に対する議論（世界の教育改革と日本）まとめのレポート</p> <p>第7回：具体的実践事例 日本</p> <p>第8回：具体的実践事例 アメリカ</p> <p>第9回：具体的実践事例 欧州</p> <p>第10回：具体的実践事例 アジア</p> <p>第11回：授業計画の立案にむけて「</p> <p>第12回：学外授業 企画展見学</p> <p>第13回：学外授業 企画展見学</p> <p>第14回：授業計画のプレゼンテーション 講評</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 事前に配布する参考資料を読み、授業での論議に参加する。</p> <p>[事後学修] 事後には、学修したことをまとめておく。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>授業ごとに配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業ごとに配布する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>2回のレポート（30%）、授業計画のプレゼンテーション（30%）、授業中の議論（40%）</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：教育実践演習(家庭)	単位数：2単位	選択 (小専)	担当教員名：平野順子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭科は、生きる力を育成する教科として期待されている。どのような授業構成によって、児童の生きる力を育成できるのか理解することができる。 ・どのような教材や地域資源の活用ができるのかを説明することができる。 ・自分で考えて、家庭科の授業計画をたてることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>家庭科の分野の中でも、主に家族・福祉・公共・消費の分野を取り上げ、学生の授業前の準備学習をもとに、よりよい授業づくりのために討論を行う。最後には、実践計画を立て、発表・議論を行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション（授業の進め方と学生の興味関心について）</p> <p>第2回：現在の家庭科を取り巻く環境と問題点、課題</p> <p>第3回：学習指導要領と家庭科に求められること</p> <p>第4回：児童を取り巻く環境と問題点、課題</p> <p>第5回：家庭科の学びの特徴と、それに基づく学習法</p> <p>第6回：教材研究 ①アナログ教材の検討</p> <p>第7回：教材研究 ②デジタル教材の検討</p> <p>第8回：地域との連携の可能性 ①子育て支援施設</p> <p>第9回：授業実践発表（1）第5学年 ①指導案の提案（発表、討論）</p> <p>第10回：授業実践発表（2）第5学年 ②指導案の修正（発表、討論）</p> <p>第11回：地域との連携の可能性 ②施設との連携方法</p> <p>第12回：授業実践発表（2）第6学年 ①指導案の提案（発表、討論）</p> <p>第13回：授業実践発表（2）第6学年 ②指導案の修正（発表、討論）</p> <p>第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 基本的に毎回、受講生の授業前の準備学習（課題、発表準備等）を元に、討論などによって授業を進めるため、準備を必要とする。</p> <p>[事後学修] 討論を振り返り、自分自身にとっての新たな視点や発見・気づきを整理する。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>授業中に指定</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業中に指定</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>毎回の授業の準備学修（30%）、授業での発表と討論（40%）、実践発表（30%）の総合評価</p>			
<p>その他：</p> <p>学外に出かける時には、授業時間外となる可能性が高い。</p>			

授業科目名：教育学特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：藤井穂高
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>授業のテーマは、資質・能力（コンピテンシー）論の理論的根拠の検討である。授業の到達目標は以下の2点である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の代表的な資質・能力（コンピテンシー）論の内容と理論的根拠を理解することができる。 ・今後の学校教育において資質・能力（コンピテンシー）の中味を考えることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>今日の学校教育をめぐる改革の論点の1つは資質・能力（コンピテンシー）の問題である。しかし、肝心の資質・能力論については諸説あり必ずしも整理されていない。そこで本講義では、児童学児童教育学専攻の学位授与の方針（3点）に基づき、今日の代表的な資質・能力（コンピテンシー）をいくつか取り上げ、その理論的根拠を吟味するとともに、今後の学校教育（幼児教育も含む）において育成すべき資質・能力（コンピテンシー）の中味を考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）の検討</p> <p>第2回：奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』の検討</p> <p>第3回：国立教育政策研究所『資質・能力[理論編]』①：資質・能力とは何か</p> <p>第4回：国立教育政策研究所『資質・能力[理論編]』②：なぜ求められるのか</p> <p>第5回：OECDのキー・コンピテンシー論①：「3つのカテゴリー」</p> <p>第6回：OECDのキー・コンピテンシー論②：理論的枠組みとしての省察性</p> <p>第7回：OECDのキー・コンピテンシー論③：コンピテンシーとは何か</p> <p>第8回：グリフィン他『21世紀型スキル』の検討①：教育と学校の役割の変化</p> <p>第9回：グリフィン他『21世紀型スキル』の検討②：21世紀型スキルとは何か</p> <p>第10回：グリフィン他『21世紀型スキル』の検討③：知識構築とそのための学習環境</p> <p>第11回：ファデル他『21世紀の学習者と教育の4つの次元』の検討①：知識の次元</p> <p>第12回：ファデル他『21世紀の学習者と教育の4つの次元』の検討②：スキルの次元</p> <p>第13回：ファデル他『21世紀の学習者と教育の4つの次元』の検討③：人間性及びメタ学習の次元</p> <p>第14回：まとめ：今日の資質・能力（コンピテンシー）論の検討課題</p>			
<p>授業外学修：(各100分程度)</p> <p>[事前学修] 授業前は、配布した文献・論文などを読み、要点と自分の意見をまとめた小レポートを作成する。</p> <p>[事後学修] 授業後は授業内容を振り返り、論点と課題を整理した小レポートを作成する。</p>			
<p>テキスト： 毎回の講義で資料を配付する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社、2017年。国立教育政策研究</p>			

所『資質・能力[理論編]』東洋館出版社、2016年。ライチェン他（立田慶裕監訳）『キー・コンピテンシー』明石書店、2006年。ファデル他（岸学監訳）『21世紀の学習者と教育の4つの次元』北大路書房、2016年。グリフィン他（三宅なほみ監訳）『21世紀型スキル』北大路書房、2014年。

学生に対する評価：

討論への参加（20%）、毎回の報告書（30%）、レポート（50%）により、総合的に評価する。

その他：

特になし

授業科目名： 教育心理学特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：平山祐一郎
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>①現代の教育に関する諸課題について、心理学的な用語や理論を適切に用いて説明できる。</p> <p>②現代の教育に関する諸課題の解決に向けて、①を踏まえ具体的なレベルで意見を出すことができる。</p> <p>以上の①②をもとに、幅広く子どもの教育や発達について論じることをテーマとする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>「教育」とは一定の方向性を持った価値に基づいた活動である。それに対して、科学性を標榜する「心理学」がどのように関与しうるのかを考えていく。児童学児童教育学専攻の学位授与の方針（3点）に基づき、この授業では、まず心理学・教育心理学の基礎事項の講義を行い、心理学の基本的な考え方を身に付けた上で、教育に関する報道を分析したり、「教育と医学」（慶應義塾大学出版会）や「児童心理」（金子書房）、「指導と評価」（図書文化社）などの教育雑誌の論文を読み解いたりしながら、教育心理学の実践的な理解を深めていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：心理学の基礎講義Ⅰ（歴史）</p> <p>第3回：心理学の基礎講義Ⅱ（理論と方法）</p> <p>第4回：教育心理学の基礎講義Ⅰ（歴史）</p> <p>第5回：教育心理学の基礎講義Ⅱ（理論と方法）</p> <p>第6回：子どもの教育心理学的理解①（発達の把握と対応）</p> <p>第7回：子どもの教育心理学的理解②（学習の指導と評価）</p> <p>第8回：子どもの教育心理学的理解③（臨床的課題の把握と対応）</p> <p>第9回：子どもの教育心理学的理解④（心身の障害についての把握と対応）</p> <p>第10回：子どもの教育心理学的理解⑤（心身の障害に関する現代的問題）</p> <p>第11回：第1回～第10回までのまとめ</p> <p>第12回：演習①：教育問題に関する「新聞報道」を分析する。</p> <p>第13回：演習②：教育問題に関する「雑誌報道」を分析する。</p> <p>第14回：演習③：教育問題に関する「インターネット情報」を分析する。</p>			
<p>授業外学修：(週3時間程度)</p> <p>各回の授業後に、①授業内容の要約、②次の授業までの課題、という2つの要素からなるミニレポートを課すので、毎回、提出すること。※週3時間半程度の授業外学修が求められる。</p>			
<p>テキスト： 使用予定はないが、必要が生じた場合、授業の中で連絡する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 授業の中で適宜提示して行く。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>①発表及びその議論への参加の程度で50%、②レポート等課題で50%、とする。</p>			
<p>その他：受講者数や受講者の状況に応じて、本シラバスの内容は調整する。発表やレポート等、成績評価に関する事項は、授業内においてフィードバックを行う。</p>			

授業科目名：学級経営特論	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：家田晴行
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級担任ではない院生にも、学級経営のポイントと工夫を盛り込んだ学級経営案を作ることができる。 			
<p>授業の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級崩壊や不登校・いじめ、校種間の接続問題等、学級を取り巻く課題は山積している。本講では、児童学児童教育学専攻の学位授与の方針（3点）に基づき、前半にこうした様々な課題に対してどのように対処し、解決を図っていくかを具体的な事例を通して討論を行う。その上で後半は、望ましい学級経営を進めて行くにはどのような配慮や工夫を重ねていくかを、具体的な経営案作成を目指した演習を重ねる。また、必要に応じて優れた学級経営を進めている教育現場を視察し、その経営のポリシーや技法を具体的に学ぶことができるようにする。 			
<p>授業計画</p> <p>第1回：本講座の趣旨と進め方について（目的と方法の確認、協力校への依頼）</p> <p>第2回：学級を取り巻く課題の概観（学級崩壊、不登校・いじめ、小1問題等）</p> <p>第3回：様々な問題についての討論(1)（学級崩壊の実状と対応策）</p> <p>第4回：様々な問題についての討論(2)（不登校・いじめ、問題行動などの実状と対応策）</p> <p>第5回：様々な問題についての討論(3)（小1問題の実状と対応策）</p> <p>第6回：様々な問題についての討論(4)（小学校高学年女子問題の実状と対応策）</p> <p>第7回：様々な問題についての討論(5)（モンスターペアレンツの実状と対応策）</p> <p>第8回：学校視察(1)（優れた学級経営を行う教諭の学級観察①）</p> <p>第9回：学校視察(2)（優れた学級経営を行う教諭の学級観察②）※①②は別の学級</p> <p>第10回：学級経営案の作成についての討論(1)（目的と方針についての確認）</p> <p>第11回：学級経営案の作成についての討論(2)（実態の把握の方法とその分析）</p> <p>第12回：学級経営案の作成についての討論(3)（学級経営案での工夫・配慮事項の検討）</p> <p>第13回：学級経営案の作成についての討論(4)（想定される課題への対応策の検討）</p> <p>第14回：まとめ（知見を整理し、小論文にまとめる）</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 事前に渡す論文、報告書等を読んで内容を解説できるようにしておくこと。</p> <p>[事後学修] 受講者で話し合った指導内容等を受け、各自授業改善に関してまとめておく。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>毎回、必要に応じて用意する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>「切り抜き速報・教育版」等の情報誌からプリントする</p>			
<p>学生に対する評価： 様々な課題に対するレポート（25%）と討論の際の発言内容（25%）、本講座における知見をまとめた小論文の記述内容（50%）で総合的に評価する。</p>			
<p>その他：特になし</p>			

授業科目名：道徳教育演習	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：走井洋一
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本演習では、道徳性を広く社会性と捉え直し、社会性の形成とその教育に関わる諸問題について取り組むことで以下のことができるようになることを目指すことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会性の形成の前提となる世界観の多様性を理解するとともに、子どもたちとともに自らが生活する社会のあり方を構想することができる。 ・社会性の形成の前提となる子どもの発達・形成の有り様と現状を正しく理解することができる。 ・種々の教育方法についてのメリット・デメリットを理解するとともに、子どもの発達・形成の有り様に最適化された教育方法を構想することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>子どもの社会性の形成を支援するためには、世界観（何を正しいと考えるのかについての多様な見方）、子ども観（子どもを白紙とは見ずに、ヒトとしての特性を把握したうえで、その発達・形成の有り様と現状を理解すること）、教育方法観（これまで取り込まれてきた教育方法とその理論的反省）を踏まえることが求められる。本演習では、児童学児童教育学専攻の学位授与の方針（3点）に基づき、これらについて取り組むことを通じて、子どもの社会性の形成を支援する際の教師のもつべき視座の獲得を目指す。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：教育を研究することはどういうことなのか？ 学習と教育の差異を中心に</p> <p>第2回：社会性の形成の前提となる世界観①—義務論</p> <p>第3回：社会性の形成の前提となる世界観②—帰結主義ないしは功利主義</p> <p>第4回：社会性の形成の前提となる世界観③—リベラリズム・リバタリアニズム</p> <p>第5回：社会性の形成の前提となる世界観④—共同体主義</p> <p>第6回：社会性の形成の前提となる世界観⑤—ローヤリズム</p> <p>第7回：社会性の形成の前提となる子ども観①—ピアジェの発達段階説とその問題</p> <p>第8回：社会性の形成の前提となる子ども観②—道徳性の発達学説の諸相（ブル、コールバーグ）</p> <p>第9回：社会性の形成の前提となる子ども観③—進化論的心理学が示す社会性の形成</p> <p>第10回：社会性の形成の前提となる子ども観④—子どもが置かれている社会的状況と諸問題</p> <p>第11回：社会性の形成の前提となる教育方法観①—指導と放任</p> <p>第12回：社会性の形成の前提となる教育方法観②—道徳教育の方法概説</p> <p>第13回：社会性の形成の前提となる教育方法観③—問題解決的学習</p> <p>第14回：社会性の形成の前提となる教育方法観④—体験的学習</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] テーマに関する文献・論文等を事前に読み、要点をまとめたうえで論点を提示すること。なお、本科目履修前に、大学の教職課程における教育原理（東京家政大学においては「教育原論」）、道徳の指導法（東京家政大学においては「道徳教育の理論と指導法」ないしは「道徳教育の理論」「道徳教育法」）の内容に習熟することが望ましい。</p> <p>[事後学修] 授業で扱われたテーマに関連して授業内で提示された新たな文献・論文等を読み、授業の内容との関連で自分なりにまとめておくこと。</p>			

テキスト： 使用しないが，必要に応じてプリントを配布する。
参考書・参考資料等： 必要に応じて提示する。
学生に対する評価： 事前学習を含めた授業における取り組み（60%），最終課題レポート（40%）
その他： 特になし

授業科目名：特別支援教育演習	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：半澤嘉博
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がいのある児童生徒に対する特別支援教育の在り方についての現状を把握し、基本的な認識を持つことができる。 ・事例研究を中心として、個別の支援計画を活用した具体的な支援の在り方について考察することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>小学校における発達障害を含め、様々な障害のある児童への教育は、個別の教育ニーズに応じた支援や指導という視点が大切である。また、障害者の権利条約の批准に向けてのインクルーシブ教育の視点からの合理的配慮や障害理解が重要である。本授業では、児童学児童教育学専攻の学位授与の方針（3点）に基づき、このような状況から障害のある児童への専門的な指導や個別の指導計画の作成・実施、関係機関との連携等を効果的に行うことができる教員の資質向上が求められるため、知的障害や発達障害の事例を基に、演習を通して具体的な支援等の在り方を検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：特別支援学校における障がいのある児童の実態把握</p> <p>第2回：個別の指導計画、個別の教育支援計画の作成</p> <p>第3回：教材・教具の作成</p> <p>第4回：障がいのある児童の指導実践（1）及び評価（知的障害）</p> <p>第5回：障がいのある児童の指導実践（2）及び評価（肢体不自由、病弱）</p> <p>第6回：障がいのある児童の指導実践（3）及び評価（視覚障害、聴覚障害）</p> <p>第7回：指導実践の報告、事例検討</p> <p>第8回：通常の学級における障がいのある児童の実態把握（発達障害を中心に）</p> <p>第9回：個別の指導計画、個別の教育支援計画の作成</p> <p>第10回：教材・教具の作成</p> <p>第11回：障がいのある児童の指導実践（1）及び評価（LD）</p> <p>第12回：障がいのある児童の指導実践（2）及び評価（ADHD）</p> <p>第13回：障がいのある児童の指導実践（3）及び評価（高機能自閉症、アスペルガー症候群）</p> <p>第14回：まとめ（最終レポート）</p>			
<p>授業外学修：（各100分程度）</p> <p>[事前学修] 各自特に研究したい障害種別の指導内容を明確にし、参考文献の概要をまとめる。</p> <p>[事後学修] 受講者で話し合った指導内容等を受け、最終レポートに関するポートフォリオをまとめていく。</p>			
<p>テキスト： 特になし。必要に応じて資料等を配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 必要な資料は適宜配布する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>課題演習、最終レポートの2面から評価する。演習課題（50%）、最終レポート（50%）とする。</p>			
<p>その他：特になし</p>			

授業科目名： 情報処理演習I	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：佐藤隆弘
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究や教育・保育の実践のために必要な情報を取捨選択し、収集することができる。 ・集めたデータを適切に分析し、処理することができる。 ・調べた事実や考察した内容について、正確かつ分かりやすく公表することができる。 ・情報のセキュリティや情報倫理について理解し、実践することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>本演習では、児童学児童教育学専攻の学位授与の方針（3点）に基づき、研究に必要な情報検索や資料作成、データ分析・統計処理、プレゼンテーションなどの知識と技術の習得を目指す。パソコンを用いた演習課題を行い、文書の作成、表計算ソフトによる表・グラフの作成と集計、データの科学的分析のために必要となる基本的な統計処理、プレゼンテーションソフトの利用法とわかりやすい説明の技法などを学んでいく。さらに、研究活動において重要となる情報倫理についても取り上げる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：パソコンの基礎、情報の検索と利用</p> <p>第2回：Wordによる文書作成（1）：文章の作成</p> <p>第3回：Wordによる文書作成（2）：図形・画像の挿入</p> <p>第4回：Excelを用いたデータ分析（1）：表の作成と計算</p> <p>第5回：Excelを用いたデータ分析（2）：データベースとグラフの作成</p> <p>第6回：Excelを用いたデータ分析（3）：関数の利用</p> <p>第8回：データ分析と統計処理（1）：基本統計量と度数分布</p> <p>第9回：データ分析と統計処理（2）：クロス集計表、相関係数</p> <p>第10回：データ分析と統計処理（3）：統計的検定</p> <p>第11回：PowerPointを使ったプレゼンテーション（1）：スライドの作成と発表の技術</p> <p>第12回：PowerPointを使ったプレゼンテーション（2）：発表演習と討論</p> <p>第13回：データ分析の注意点と倫理的配慮</p> <p>第14回：まとめ・総復習</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>[事前学修] この演習では、予習よりも復習に重点を置く。各自の進行度に応じて課題を課すので、次回の授業までに実施しておくこと。予習として資料やテキストの確認を行う。（80分程度）</p> <p>[事後学修] 復習として授業で行った内容の確認や与えられた課題に取り組む。（120分程度）</p>			
<p>テキスト： 受講者と相談の上で決定する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 授業の進行に応じて、授業中に適宜紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価： 授業期間中に課す課題の結果40%、最終課題（プレゼンテーション）（30%）、平常点（30%）を目安として総合的に評価する。</p>			
<p>その他： 普段使っているノートパソコンの持ち込みを許可する。パソコンを持ち込まない人は、USBメモリを持参すること。</p>			

授業科目名：情報処理演習Ⅱ	単位数：2単位	選択 (幼・小専)	担当教員名：平山祐一郎
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>・情報を適切に検索できる。・検索された情報を批判的に分析することができる。・電子媒体と紙媒体での情報読解の相違を説明できる。・電子媒体において分かりやすい表現を工夫することができる。以上の4点をもとに、こどもに指導する方法について理解を深めることをテーマとする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童学児童教育学専攻の学位授与の方針（3点）に基づき、「情報処理演習Ⅱ」においては、パーソナル・コンピュータ及びインターネットを教育に活用する技術・方法を、①情報の「検索」、②情報の「読解」、③情報の「表現」の3つのポイントから実践的に身に付ける。さらに、こどもに情報の検索や読解、表現を指導する場合の効果的な手法について学び、その際に浮かび上がる種々の問題点を考える。そして、ディスカッションを通じて今後に生じうるであろう諸課題について検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション：「情報処理演習Ⅱ」の目的と演習の概要説明</p> <p>第2回：情報の検索①：情報検索の高度な方法</p> <p>第3回：情報の検索②：検索で得られた情報の評価</p> <p>第4回：情報の検索③：こどもに対する情報検索の指導方法</p> <p>第5回：情報の検索④：①～③に関するディスカッション（今後の課題について）</p> <p>第6回：情報の読解①：電子媒体と紙媒体の長所・短所</p> <p>第7回：情報の読解②：電子媒体での読解の特徴について</p> <p>第8回：情報の読解③：電子情報のクリティカル・リーディングについて</p> <p>第9回：情報の読解④：こどもに対する電子情報の読解指導方法について</p> <p>第10回：情報の読解⑤：①～④に関するディスカッション（今後の課題について）</p> <p>第11回：情報の表現①：電子媒体での表現における著作権について</p> <p>第12回：情報の表現②：「ワード」を用いた効果的な情報の表現</p> <p>第13回：情報の表現③：「パワーポイント」を用いた効果的な情報の表現</p> <p>第14回：情報の表現④：こどもに対する電子情報の表現指導方法について</p>			
<p>授業外学修：(週3時間程度)</p> <p>各回の授業後に、①授業内容の要約、②次の授業までの課題、という2つの要素からなるミニレポートを課すので、毎回、提出すること。</p>			
<p>テキスト： 東京家政大学図書館「東京家政大学生のための情報リテラシーテキスト2020」を東京家政大学図書館から入手しておくこと。それ以外の教科書も必要が生じた場合、授業の中で連絡する。</p>			
<p>参考書・参考資料等： 授業の中で適宜提示して行く。</p>			
<p>学生に対する評価： ①発表及びその議論への参加の程度で50% ②レポート等課題で50%</p>			
<p>その他： 受講者数や受講者の状況に応じて、本シラバスの内容は調整する。発表やレポート等、成績評価に関する事項は、授業内においてフィードバックを行う。</p>			

授業科目名：研究指導 特別研究	単位数：10単 位	必修	担当教員名：20名
<p>授業の概要</p> <p>児童学、児童教育学に関する研究の実践、指導を行い、またこれらについて論文指導を行う。</p> <p>(戸田雅美)</p> <p>保育行為の判断の根拠について検討することを中心とする研究を行う。具体的には、実践事例を基にした研究や保育者を対象とする実践についてのインタビュー研究を行う。</p> <p>(岩崎美智子)</p> <p>子どもと家族に関わる問題、子育て支援、保育者に関する事柄を中心に研究指導をおこなう。ゼミでは、学生による報告と討議を中心とし、授業担当者は論文執筆に対する助言指導をする。</p> <p>(榎沢良彦)</p> <p>子どもや保育者の生を理解することを通して、保育実践(子ども同士、子どもと保育者の関わり)における本質や普遍性を捉えるための指導を行う。</p> <p>(大澤力)</p> <p>幼児期の自然教育や環境教育にて、ビオトープ・飼育栽培・里庭等を活用した科学性の芽生えを促進する課題の研究指導を行う。</p> <p>(是澤優子)</p> <p>資料や文献などを用いた文献研究の手法を用いて、児童文化史、児童文化観などの課題に関する研究指導を行う。</p> <p>(笹井邦彦)</p> <p>乳児期、幼児期、児童期にある子どもたちの音楽教育全般を扱うが、とりわけ子どもたちに提示する音楽の質をメロディー、ハーモニー、リズムの三要素から分析し、創作、及び実践研究を行う。</p> <p>(高野貴子)</p> <p>疾病・障害のある子どもの発育、発達に関する実践的研究、保育・医療・福祉の連携などの調査研究を行う。</p> <p>(走井 洋一)</p> <p>子どもの社会性(例えば、道徳性、キャリア、など)の形成およびその支援の在り方についての理論的研究を行う。大学院生による主体的な取り組み(報告)と授業担当者の助言によって進める。</p>			

(花輪 充)

演劇と教育をテーマとし、演劇的手法を活用した表現活動の教育的意義とその効果を探究する。具体的には、乳幼児期から児童期にかけての取り組みや、演劇教育の歴史的変遷、構成・演出等指導法について実践的研究を進める。

(半澤嘉博)

小学校において発達障害等により学習や生活面で個別の支援が必要な児童が増えてきている。学級担任として学級経営、学習指導、環境整備等、どのように工夫・配慮していくかを課題として研究する。

(平山祐一郎)

心理学的な事例研究法及び調査研究法によって、幼児期・児童期・青年期の学習活動または言語活動について、その発達の様相を記述する、あるいは教育的介入の効果を検討する研究指導を行う。

(宮島 祐)

発達障害（神経発達症群）の概念に至った経緯、および保育・教育の現場で問題となっている現状を鑑み、事例を交えての理解と対応について学びを深め、関心あるテーマに沿って必要な情報収集、調査など実践的な研究を進める。

(結城孝雄)

知識基盤社会において創造性が着目され、これからの社会で芸術の果たす役割が注視されている。そこで、本研究では、社会と芸術の関係を具体的事象から考察し、今後の社会における芸術と人間形成の関係を再検討する。

(阿部 崇)

障害者スポーツ、障害のある子どもの運動あそびについて研究を深める。先行研究で明らかとなったこと、明らかとなっていないことを明確にしなが、独自の研究に取り組む。

(武田洋子)

園やその他の子育て支援関連施設などにおける親子（家族）への支援をテーマとする研究への指導を行う。

(野口隆子)

乳幼児期の発達と社会・文化との関連、保育・教育実践との関連について探求するため、発達研究の方法論を理解し、報告と討議を重ね、研究指導を行う。

(野澤純子)

知的障害や発達障害のある乳幼児の発達や特別支援教育に関して、調査研究や心理・教育的視点からの実践研究を行う。

(細井香)

子ども支援、保護者支援の視点から、子どものライフスタイルや健康、子どもを取り巻く環境等の実態を調査し、子どもの健やかな育ちを守るための支援的環境の在り方に関する研究指導を行う。

(堀 科)

乳幼児期の発達の特徴をふまえ、保育における生活と遊びの援助のあり方を課題として研究指導を行う。事例研究、観察法、インタビューなどの資料を通して、子どもをとりまく事象について考察を深め、保育学理論の見地により研究を進める。

(森田浩章)

児童文化における具体的な実践研究、特に、幼児の演劇、ペープサート、影絵、アニメーション等の事例研究を行う。また、児童文化を広く「子どもと文化」と、とらえ、大人社会と「子ども世界」を考えることも目的の一つである。